

うちわたし
野多目拈渡遺跡 4

福岡市埋蔵文化財調査報告書第333集



1993

福岡市教育委員会

序

野多目古墳遺跡は、福岡市の南部に位置し、これまでの3回の発掘調査で、縄文時代後期から古代におよぶ遺構・遺物の出土が知られている遺跡です。一方、野多目古墳遺跡を含む福岡市南区一帯は、市街地南郊の住宅地として開発が進んできた地域でもあります。

平成3年、野多目古墳遺跡の西部で宅地造成計画が持ち上がり、福岡市教育委員会では、発掘調査を実施して、記録保存に努めました。その結果、縄文時代後期の貯蔵穴を始めとして、多くの遺構・遺物を検出しました。本書は、この野多目古墳遺跡第4次調査の成果を報告するものです。

本書が、市民の皆様の文化財に対する理解を深めていく上で広く活用されると共に、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

発掘調査から資料整理までの費用負担および種々の便宜をはかっていただいた段谷産業株式会社をはじめとする、多くの方々のご協力に対し、心から謝意を表すものです。

平成5年1月

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

例 言・凡 例

1. 本書は、宅地造成に先立って福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、福岡市南区野多目2丁目275番1に関する調査の概要を報告するものである。
2. 本書の編集・執筆は、大庭康時が行った。
3. 本書に使用した遺構実測図は大庭および大庭智子が、遺物実測図は大庭が作成した。整図には、大庭・井上涼子・萩尾朱美があつた。なお、遺構実測図に用いた方位は、磁北である。また、遺物実測図の遺物番号は、各遺構ごとに通し番号とした。
4. 本書に使用した遺構・遺物写真は、大庭が撮影し、萩尾朱美が焼付した。なお、遺物写真中の遺物番号は、遺物実測図のそれと一致している。
5. 遺物を整理するにあたっては、田中良之氏（九州大学）・千葉豊氏（京都大学）・山崎純男氏・杉山富雄氏・小畠弘己氏（福岡市教育委員会）の御指導・御教示をいただいた。
6. 本調査に関わるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵管理・公開される予定である。

本文目次

第一章 はじめに.....	1
1. 発掘調査にいたるまで.....	1
2. 発掘調査の組織と構成.....	1
3. 遺跡の立地と既往の調査.....	2
第二章 発掘調査の記録.....	4
1. 発掘調査の概要.....	4
2. 遺構と遺物.....	6
(1) 1号土壙.....	6
(2) 2号土壙.....	14
(3) 3号土壙.....	14
(4) 4号土壙.....	20
(5) 5号土壙.....	23
(6) 6号土壙.....	25
(7) 7号土壙.....	25
(8) 8号土壙.....	25
(9) 1号流路跡.....	26
⑩ 包含層出土遺物.....	43
第三章 まとめ.....	45
1. 繩文時代の遺構分布について.....	45
2. 貯蔵穴について.....	45
3. 繩文土器について.....	45

表紙写真 3号土壙出土中津Ⅱ式土器（実測図 Fig. 18-5）

裏表紙写真 1号流路跡下層出土阿高Ⅰ式土器（実測図 Fig. 35-1）

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

1991年4月12日、段谷産業株式会社より、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市南区野多目2丁目地内における埋蔵文化財事前調査願が提出された。同地は、野多目C遺跡の西に隣接し、これまでの3次にわたる発掘調査から遺跡の存在が予想された地点であった。

申請を受けた埋蔵文化財課は、1991年4月30日試掘調査を実施し、遺構の存在を確認した。この結果、開発にあたっては発掘調査が必要であるとの判断から段谷産業株式会社との協議を重ね、盛土による宅地造成工事の道路部分に関して発掘調査を実施、宅地部分については後世にゆだねることで合意をみた。

これに基づき、埋蔵文化財課は、1991年8月19日より、発掘調査を実施した。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	段谷産業株式会社
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉
調査統括	埋蔵文化財課課長 折尾学 同 第2係長 塩屋勝利
調査庶務	同 第1係 古田麻由美
調査担当	同 第2係 加藤良彦（試掘調査） 人庭康時
調査作業	江越初代 大庭智子 金澤春雄 金子國雄 権藤利雄 間加代子 関義穂 曾根崎昭子 村崎祐子 森山恭助 森山タツエ 脇田栄
資料整理	生垣綾子 井上涼子 国武真理子 濱戸満寿江 田中真樹 萩尾朱美 古谷宏子 保利みや子

なお、発掘調査に関する種々の条件整備・調査中の便宜等については、段谷産業株式会社の御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

遺跡調査番号	9121	遺跡略号	NMC-4
調査地地番	南区野多目2丁目275番1	分布地図番号	老司40
開発面積	1,269m ²	調査対象面積	170m ²
調査期間	1991年8月19日～9月4日	調査実施面積	150.77m ²

3. 遺跡の立地と既往の調査

野多目古渡遺跡は、「福岡市文化財分布地図 中部南部」(福岡市教育委員会 1980年)において、野多目C遺跡として周知された遺跡である。福岡平野を北流する郵河川の西岸に形成された河岸段丘(中位段丘)上に位置している。

野多目古渡遺跡においては、これまで3次にわたる調査を実施している。

第1次調査 公園建設に伴う調査で、1980年7~11月、1981年8~10月に実施した。地上保存を前提としており、遺構のほとんどはプランの確認にとどめている。旧石器時代の包含層、縄文時代後期初頭の貯蔵穴・溝・旧河川、弥生時代前期後半から中期初頭の住居跡・貯蔵穴、古墳時代の住居跡、古代の掘立柱建物群を検出した。(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第93集 1983年、以下「市報」と略す)

第2次調査 下水道管理設に伴う調査で、1984年10~11月に実施した。第1次調査地点の北側前面を、幅1mで横長く調査した形になっている。縄文時代後期初頭の貯蔵穴、古墳時代の柱穴、古代の流路(川跡)を検出した。(『市報』第136集、1986年)

第3次調査 道路拡張に伴う調査で、1985年3月に実施した。第1次調査地点の南西角から西に、幅約5mの調査区を45m程のばした形となる。縄文時代晚期中頃の貯蔵穴・溝・河川を検出した。(『市報』第160集、1987年)

これらの遺構の位置関係は、Fig. 2に示す通りである。

なお、野多目A~C遺跡では、これまで上記を含めて7次の調査を行っている。それぞれの詳細および、野多目遺跡周辺の歴史的環境については、各報告書を参照されたい。(『市報』第85集、103集、159集、263集)



Fig. 1 野多目遺跡群調査地点位置図 (1/25,000)

- A. 野多目A遺跡 B. 野多目B遺跡 C. 野多目C遺跡 1. A-1次調査 2. C-1次調査
3. 古層敷調査 4. A-2次調査 5. C-2次調査 6. C-3次調査
7. A-2次調査 8. C-4次調査

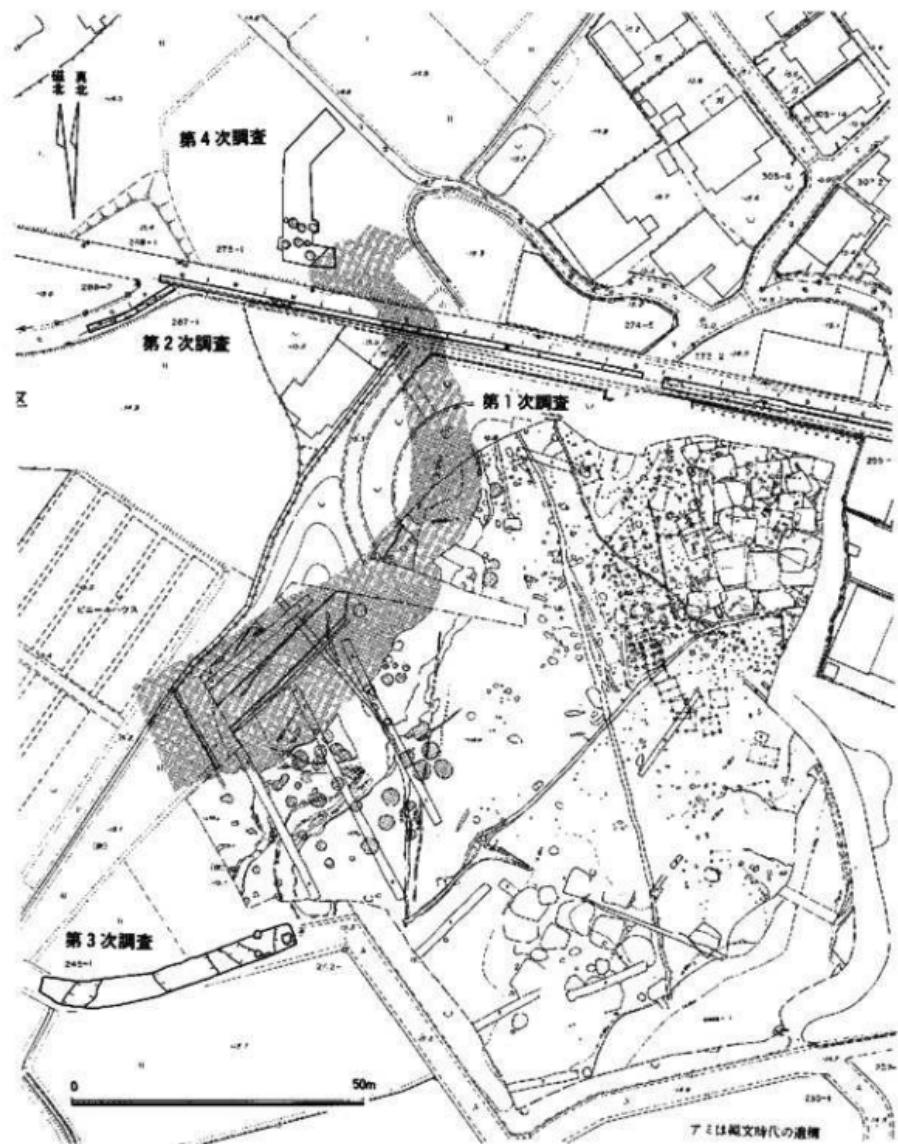


Fig. 2 野多目古墳遺跡調査地点位置図 (1/1,000)

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の概要

発掘調査は、1991年8月19日から9月4日まで実施した。調査対象部分には、南側道路に平行して、隣接する水田から水をおとす水路が含まれており、この部分は調査対象から除いた。

検出した遺構は、旧河川1条、土壌8基である。遺構はすべて調査区の南側に偏っていた。調査区北側では粗砂層がみえており、トレンチを入れて確認したところ、粗砂層は遺構を検出した黄灰色シルト層の下に入り込むことが判明した。したがって、本調査区の北半部分には、本来遺構が営まれなかつたものと考えられる。黄灰色シルト層の上は、古代の遺物を少量包含する灰色～暗褐色土に覆われており、さらにその上は水田土壌となっている。

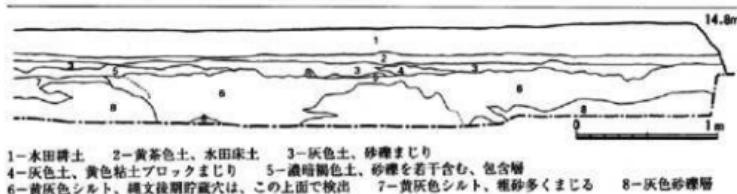


Fig. 3 トレンチ2 土層実測図 (1/40)

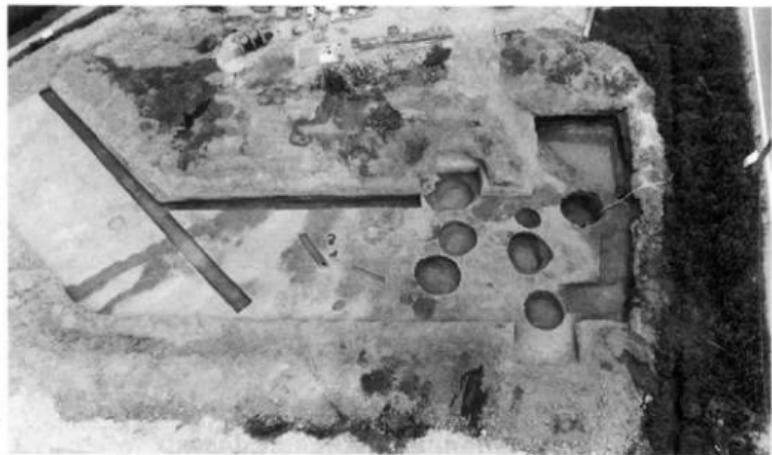


Fig. 4 調査区全景 (西より)

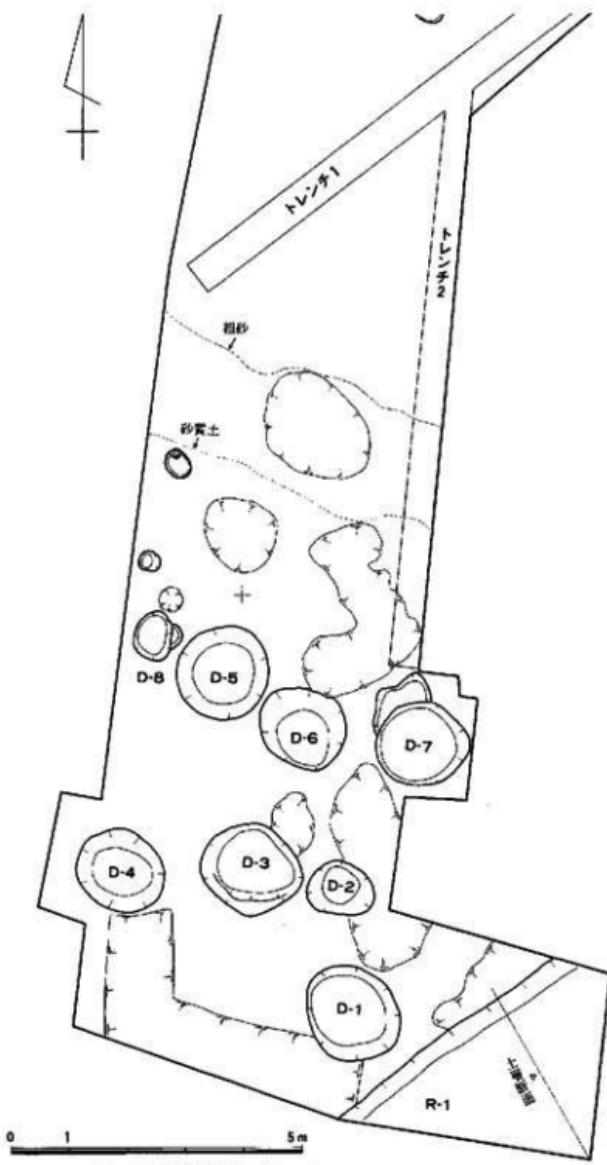


Fig. 5 造構全体図 (1/100) Dは土壘、Rは流路

2. 遺構と遺物

(1) 1号土壙 (Fig. 6~13)

縄文時代後期初頭の貯蔵穴である。長径173cm、短径148cmの楕円形の平面を呈し、深さは80~100cmをはかる。土壙の壁は比較的立っており、特に北半分では、オーバーハング気味となる。

埋土中の粘質土からは、木の枝などの有機質遺物にまじって、イチイガシの実が数点採集された。また、1層、2層、4層からは、獸骨片が出土した。獸骨片は、いずれも少片で、火熱を受け、焼けていた。食用に供されたものであろう。

出土遺物 1~9は、阿高式系土器である。1は把手の一部と考えられる。指押えで整形した後、ヘラ状工具による沈線を施す。滑石粒を多く含む。3は、口縁部に凹点文を施す。口縁部は、外面は幅2cm程、内面では幅1cm程に粘土を貼り付け、肥厚させる。凹点は、この肥厚した口縁部の外面に、指頭を用いてつけられたもので、凹点内には爪の痕跡が認められる。滑石は含まない。5は、棒状工具を用いて口縁部に凹点、口唇部に刻みをつけるものである。器表外面のナデ調整が粗いのに対し、内面は丁寧にナデられている。外面には、煤が付着する。滑石は含まない。6

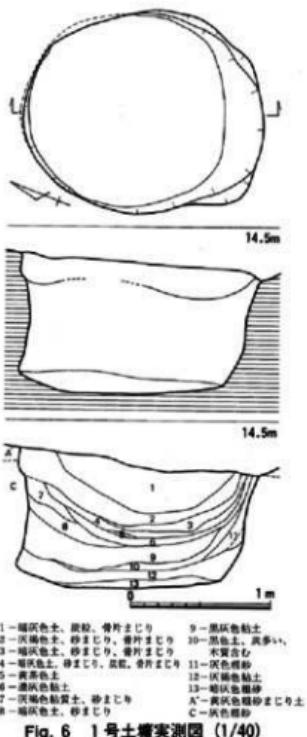


Fig. 6 1号土壙実測図 (1/40)

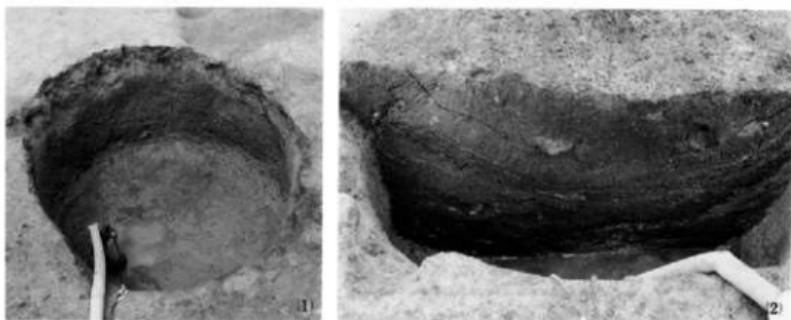


Fig. 7 1号土壙 (1)完掘状況 (2)土層断面 (南西より)

も凹点文土器である。指頭による凹点を、口縁部に2列施す。凹点内には、爪の痕跡が残っており、向かって右側が爪の表面、左側が指肉となる。内面は二枚貝条痕をとどめるが、口縁部内面のみナデ調整で消されている。滑石は含まない。7は、浅い凹線文を施すもので、爪の先端のみが沈線状にはっきりと刻まれている。8は、粘土を貼りつけて肥厚させた口縁部に、ヘラ状工具で「く」字文を刻む。口縁帯下部の隆起上には、爪で刻み目を施す。滑石は含まない。9は、指頭による凹点文土器である。破片外面の下端部は斜めに面取りされており、ナデ調整によって口縁部を肥厚させたものと思われる。

10~14は、磨消繩文系土器である。10はゆるい波状口縁に穿孔したもので、R L繩文が施され、内外面ともヘラミガキされる。11は、脛部小片である。2本の平行した沈線と擬似繩文がみられる。沈線間と内面は、研磨される。12は、口唇部に刺突を施す。刺突は細い茎状のもので、2回を1単位として突いている。13は沈線文土器である。内外面ともナデ調整する。14は、口唇に浅い刻みを有する。ゆるい波状11線になるものと思う。外面に巻貝条痕をとどめる。

15は、沈線文土器である。ヘラ先状工具による沈線を、クランク状に重ねる。口唇部には極めて薄い工具による刻みを施す。口縁部外面には、円形付文が見られる。型式不明である。16は、無文の精製土器である。内外面とも研磨されている。

17~36は、粗製土器である。17~19は、口縁部を外反させるもの、20~24は内彎させるもの、25~36は直行させるものである。17は、調整が極めて丁寧なナデ調整で平滑に仕上げており、むしろ精製土器又は半精製土器に加えるべきであろうか。18・23・29・33・35・36の外面には、煤が付着している。35・36は大型の深鉢形土器で、復原口径はそれぞれ36.6cm・52.6cmをはかる。ともに、内面には板目状のナデ調整痕がみとめられる。37~55は、底部である。38~44は、底部の端が外方へ鋭くつき出すものである。44の外底部は、外周側では円弧に沿ったナデ、中央部付近では一方向のナデ調整が施されている。46・47は、張り出した底部端部が大きく丸味を持つもので、上げ底気味となる。37・48は、半底で底部はあまり張らない。49~51は、やや張った底部で、高台状の上げ底となる。52~54は、小さく外方に張り出した半底につくるものである。55の底部は、全く張らず、体部から直接的にすばまって平底をつくる。45は、凸底気味となる。

Fig. 12に示したのは、石鎚である。56・57は円基式である。56は極めて小さいもので、長さは1.4cmをはかるにすぎない。57は未製品である。裏面には主刺離面を残しており、押圧刺離が途中のままになっている。58~62は四基式である。58・59は先端を欠く。60は、一応両面から刺離が行われているが、丸味が強く先端も作られていない点から、未製品と考えられる。62は、いわゆる錐形鎚である。63は、石鎚の体をなさないが、未製品と考えた。側縁の一部を欠く。56~60は、黒曜石製、61~63は、安山岩製である。

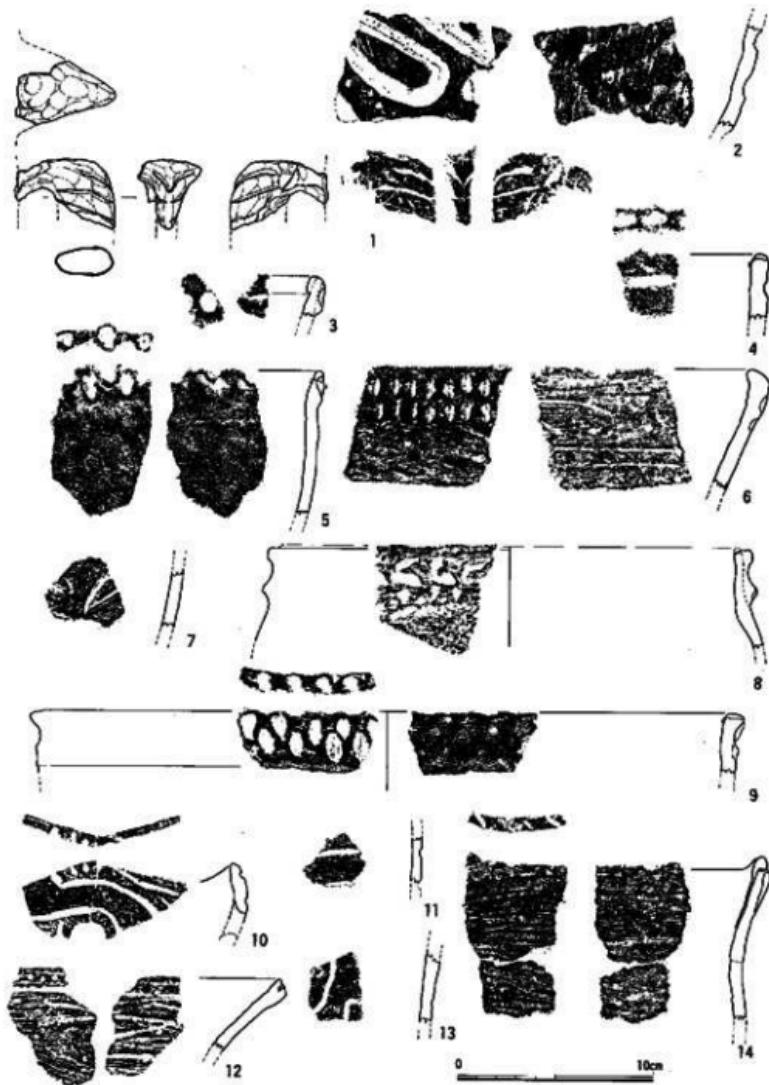


Fig. 8 1号土墙出土遗物实测图1 (1/3)

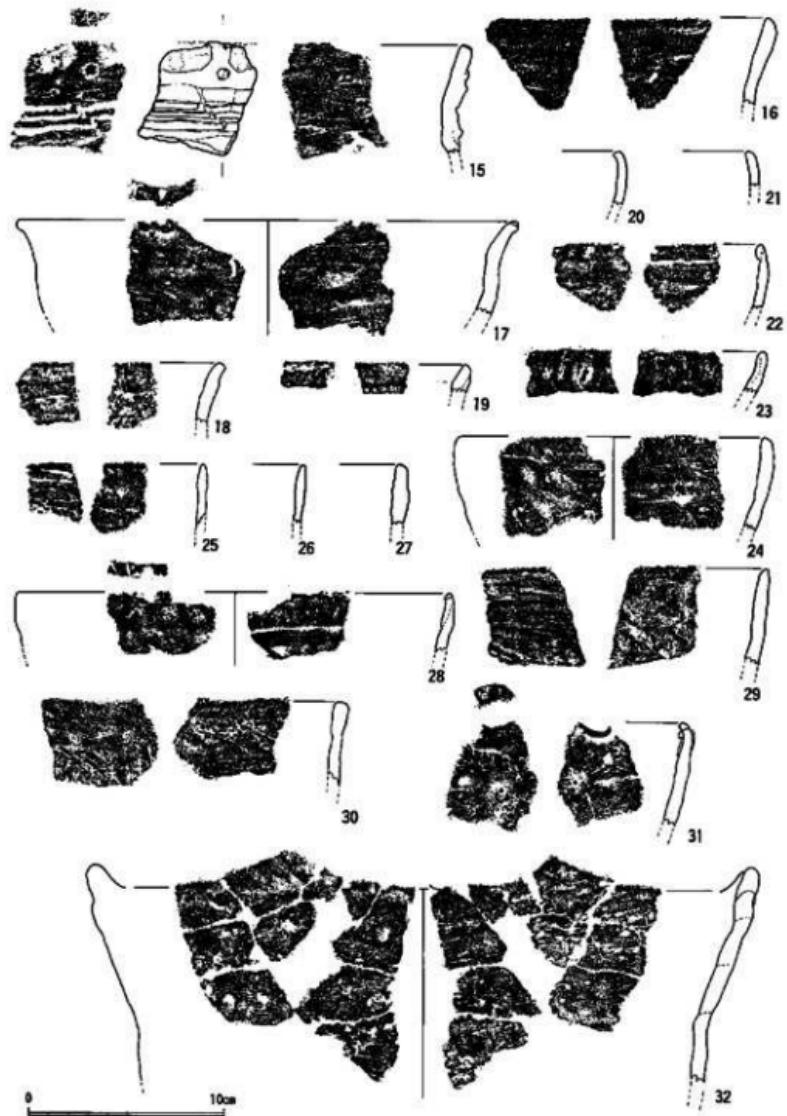


Fig. 9 1号土壤出土遺物実測図 2 (1/3)

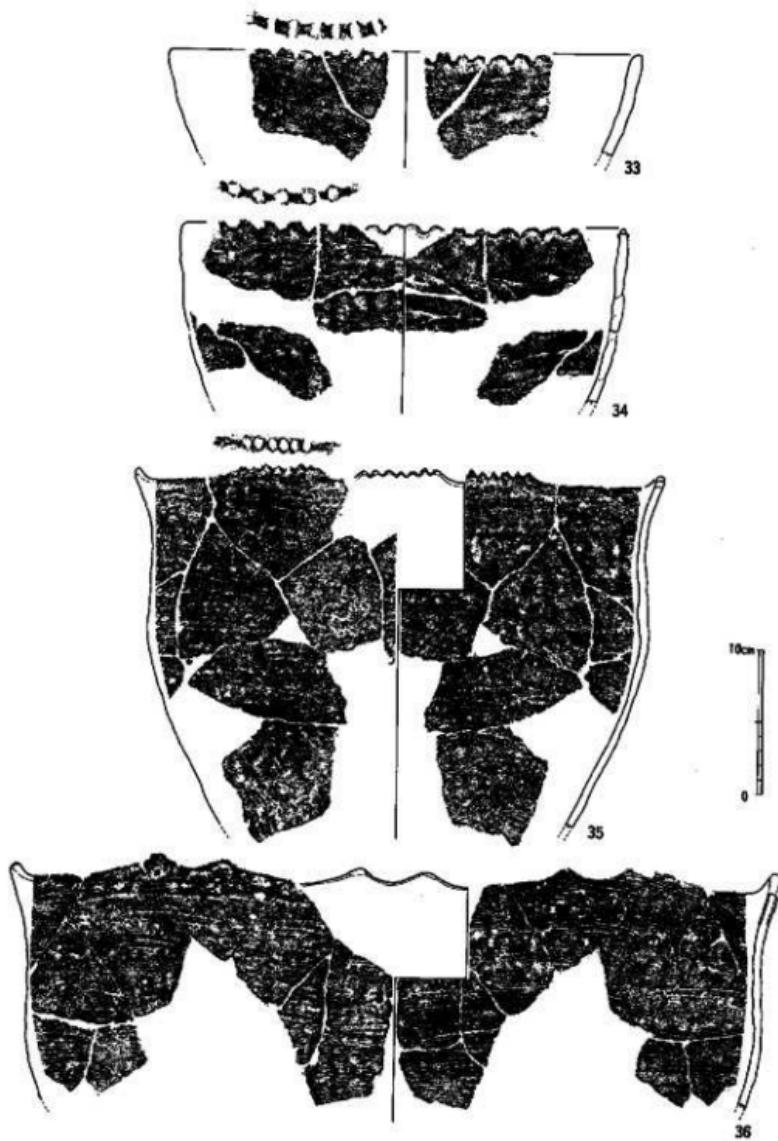


Fig. 10 1号土壤出土遗物实测图 3 (1/4)

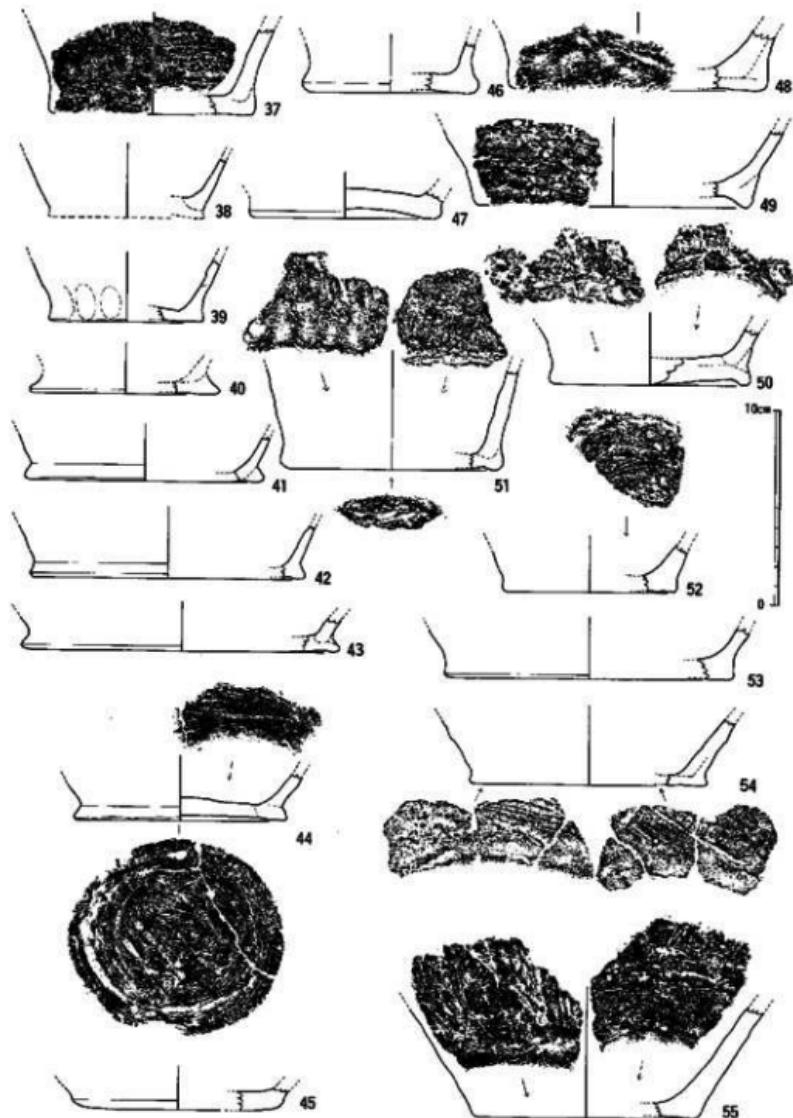


Fig. 11 1号土塘出土遗物实测图 4 (1/3)

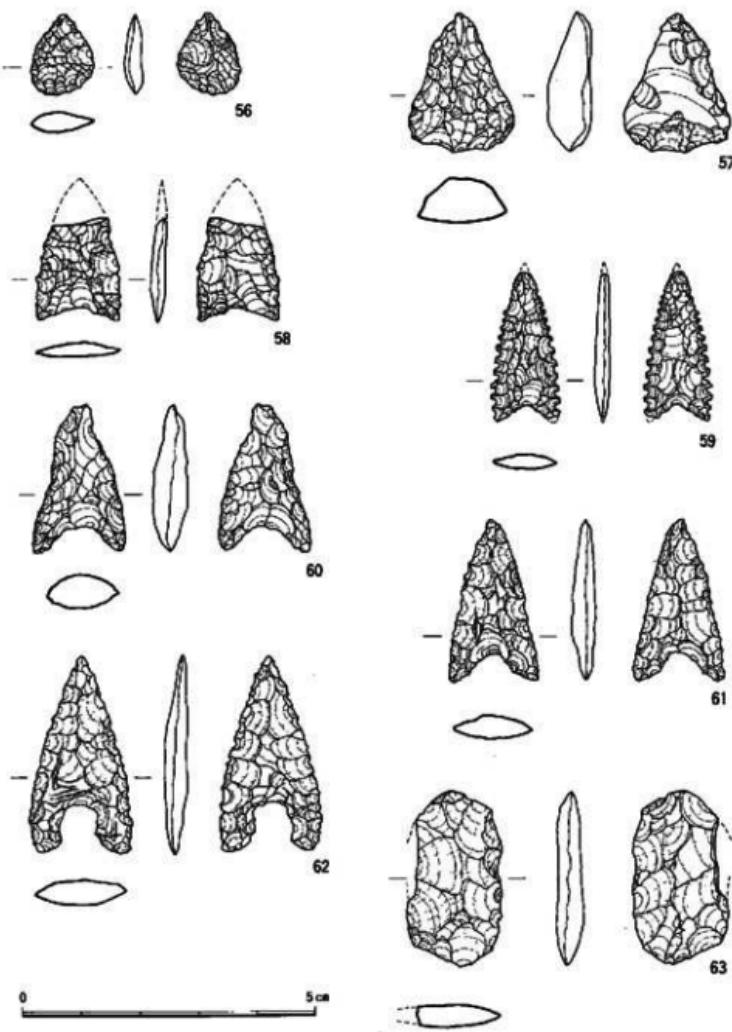


Fig. 12 1号土墙出土遗物实测图 5 (1/1)

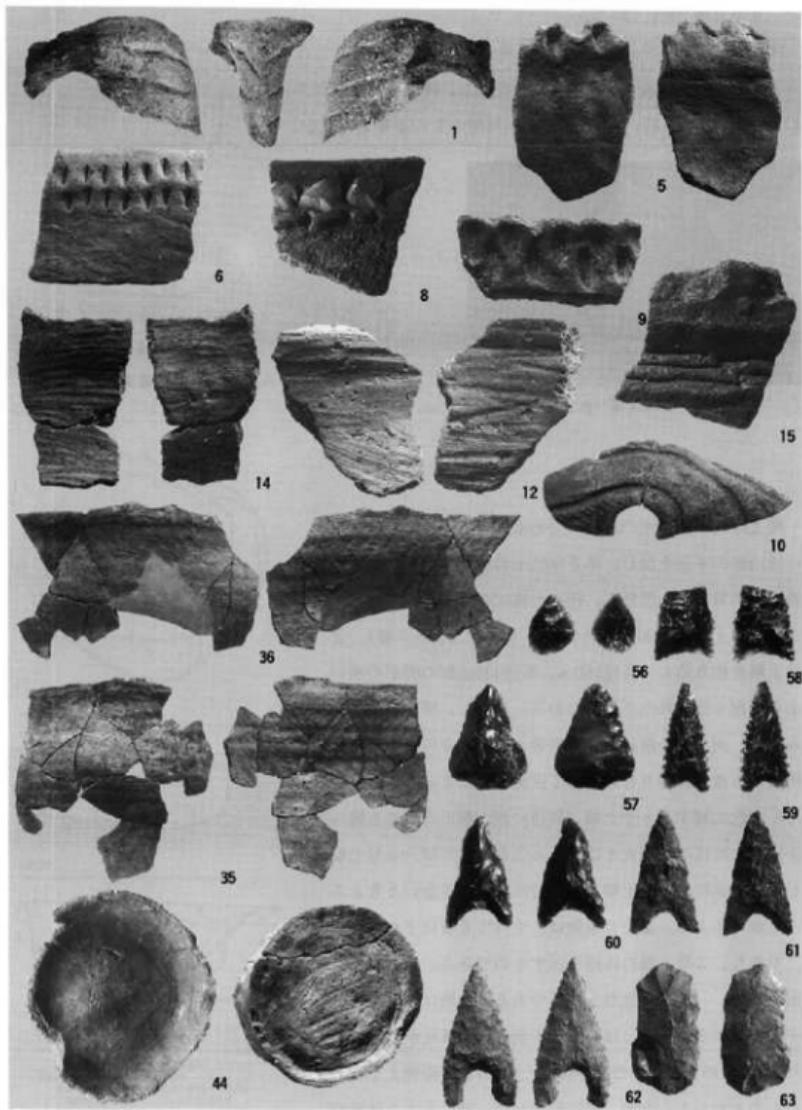


Fig. 13 1号土壤出土遗物 (缩尺不同)

(2) 2号土壙 (Fig. 14・15)

径100cm、深さ35cm程の円形の土壙である。他の貯蔵穴と比べて小さく、貯蔵穴とするには疑問が残る。縄文土器片が出土しているので、一応、他の貯蔵穴と同時期のものと考えている。

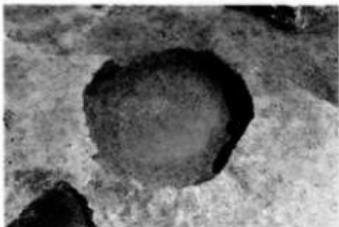


Fig. 15 2号土壙 (西より)

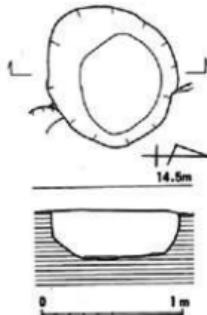


Fig. 14 2号土壙実測図 (1/40)

(3) 3号土壙 (Fig. 16~21)

縄文時代後期初頭の貯蔵穴である。長径150cm、短径130cmの梢円形の平面を呈し、深さは55cm前後をはかる。土壙の西侧と南側に、一段低く、浅い土壤状の落ちがみられる。これは、土層断面図にもあらわれており（1～7層）、3号土壙を切り込んで長径160cm、短径130cm程の卵形の浅い土壙が掘り込まれたことがわかる。ただし、埋土の状況をみると、両土壙の間に大きな差異はなく、そのため遺構検出時にも遺構の切り合いとして区別することはできなかつた。古代に属する8号土壙（後述）が、埋土の上でも明らかに縄文時代の貯蔵穴とは異なることをみれば、3号土壙とその上面における土壙とは、時期的に大差ないと考えることができよう。また、遺物は、すべて8層以下からの出土であり、3号土壙の時期を示すものである。

出土遺物 1は、匙形土製品である。内面は、平滑にナデ調整される。外面には、指頭圧痕の下に掌紋が残っており、手の平の上で全体の形を作った後、外面の指揮えを行つたものとわかる。なお、梢円形平面の一端に小さな破面があり、ここにつまみが付いたものと推定される。

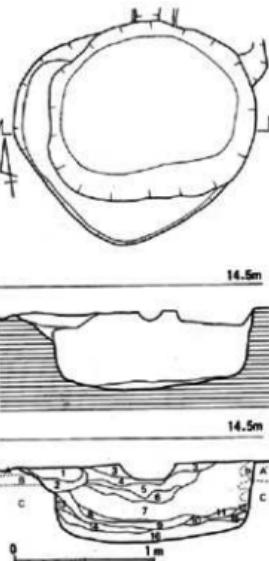


Fig. 16 3号土壙実測図 (1/40)

2・3は、阿高式系土器である。3は、口縁部下に粘土紐を貼りつけ、この間を口縁部文様帶としたもので、茎状の工具を2回1単位として横に引いて、上下2段の凹線を施す。滑石は含まない。

4～9は、磨消繩文系土器である。4は、器表が剥落し遺存状態は悪いが、卷貝基部による刺突文が並ぶ。5は深鉢形土器である。底部を欠くが、ほぼ全形を知りうる（表紙写真）。口縁部は6～7本を単位とする波状口縁につくる。波頭間に小さな瘤状の突起がある。瘤状突起のナデ調整は、口縁部の繩文にかぶって施されており、また突起の下に小さな亀裂がみられることから、瘤状突起は波状口縁の整形・施文後に貼り付けたものと知れる。口唇部は、浅く沈線状に凹む。口縁部及び胴部の繩文は、LR繩文である。内外面とも横方向の卷貝条痕調整を行うが、外面では施文部以上の無文部分は研磨、施文部以下には横方向のナデ調整を加える。また、体部下半部の外面には、若干だが煤が付着している。胎土には粒径1mm以下の砂粒・雲母を含み、茶色～暗褐色の色調を呈する。復原口径29.5cm、推定底径9.7cm、推定器高23.5cmである。中津II式にあたる。6は、福田K II式の口縁部である。破片から見る限り、波状口縁になると思われる。口縁は内外に肥厚し、口唇部に沈線をめぐらす。沈線から外面にかけての口唇部上面には、卷貝による擬似繩文を施す。7～9は磨消繩文系の粗製土器である。ただし、8は外面を研磨しており、半精製土器とするべきかもしれない。

10～21は、粗製土器である。10～12は、外反する口縁をもつ。10は、器肉が極めて薄く、波状口縁の口唇部内面には工具先端による刺突文が並ぶ。ナデ調整も丁寧で平滑に仕上げられており、精製土器に加えるべきかも知れない。13～20は、内彎する口縁を持つものである。13は、胴部中位の破片を欠くが、同一個体として図上復原した深鉢形土器である。器表は、内外面ともナデ調整されるが、粘土紐の接合痕を明瞭にとどめている。底部は、外方に張り出した平底で、若干上げ底気味を呈する。14は、浅鉢形土器である。口縁は、おそらく4本を単位とするゆるい波状口縁である。波頂部の破片は、他の口縁部片・体部片とは接合できず、推定復原してはめこんでいるが、大過なかろう。内外面ともナデ調整するが、外面にはナデ調整の下に、

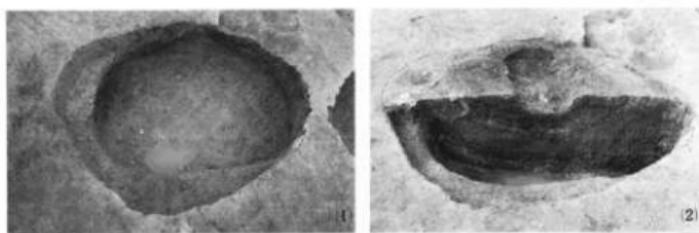


Fig. 17 3号土壙 (1)完掘状況 (2)土層断面 (南より)

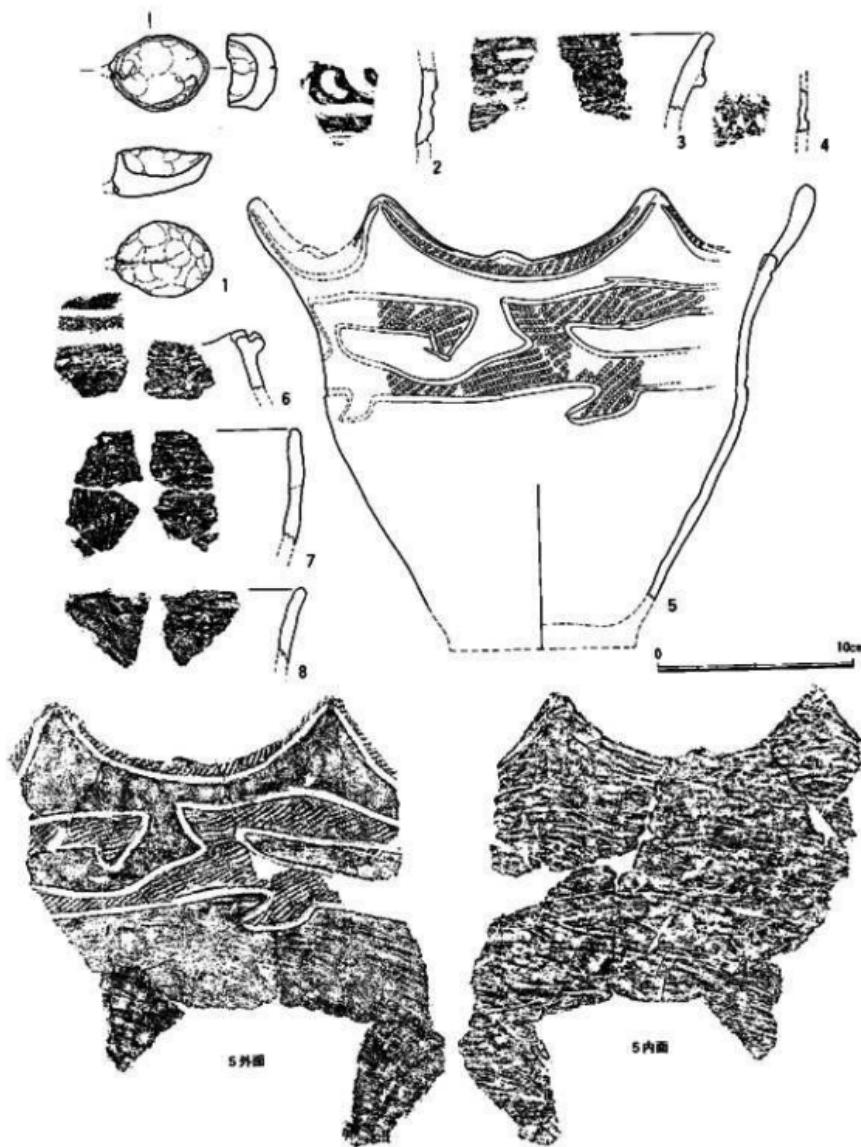


Fig. 18 3号土器出土遺物実測図1 (1/3)

指押えによる凹凸を明瞭にとどめている。内底部も、指押えの後、ナデ調整する。16は、内外面に二枚貝条痕をとどめる。外面には、煤が付着している。17は、内面は平滑に丁寧なナデ調整を行い、外面は縱方向に研磨もしくはヘラナデ調整を施している。半精製土器とするべきか。粘土粒の痕跡を明瞭にとどめている。なお、破片のひとつは、1号土壙より出土した。19も、

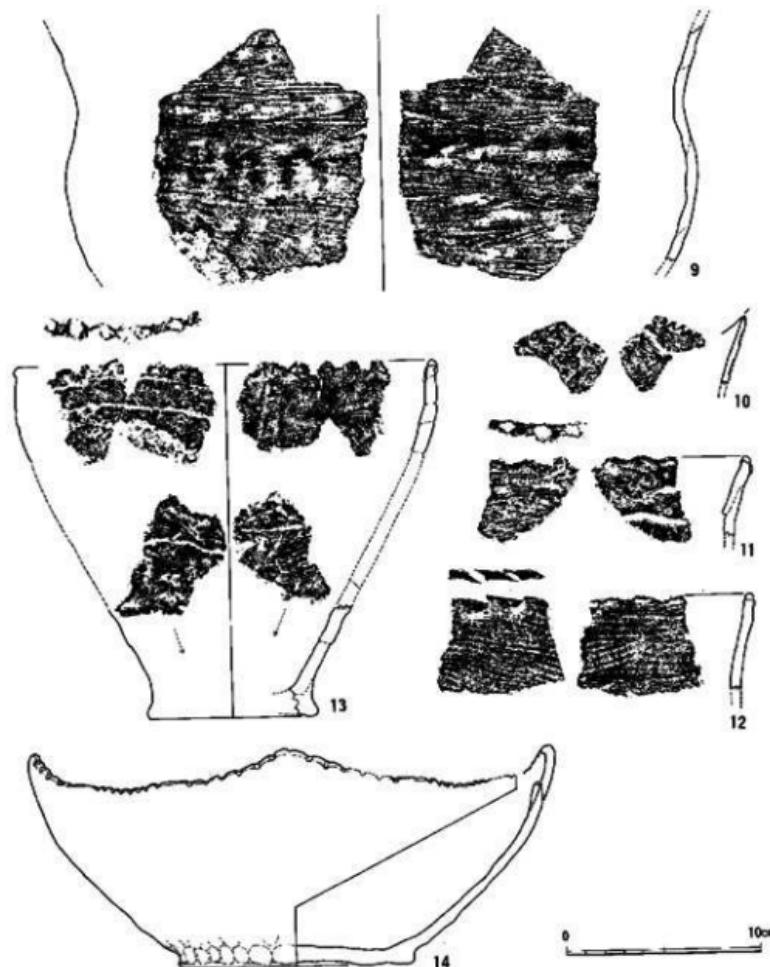


Fig. 19 3号土壙出土土器実測図 2 (1/3)

外面には横方向の研磨を施しており、半精製土器に分類するべきであろうか。内面は、指押えの後、横位のナデ調整を施す。20は、内外面とも器表には細い水裂状の亀裂がはいって、表面だけが剥離しており、スリップを施した可能性が考えられる。胎土も1mm前後の砂粒を多く含むものの、粗砂は全くまじらず、精製土器もしくは半精製土器とみるべきかも知れない。内外面とも、ナデ調整で平滑に仕上げる。21は底部である。内面はナデ調整、外面は指押えの後、ナデ調整する。若干、上げ底気味となる。復原底径14.0cm。

3号土壤からは、この他、黒曜石・安山岩の剝片が出土している。

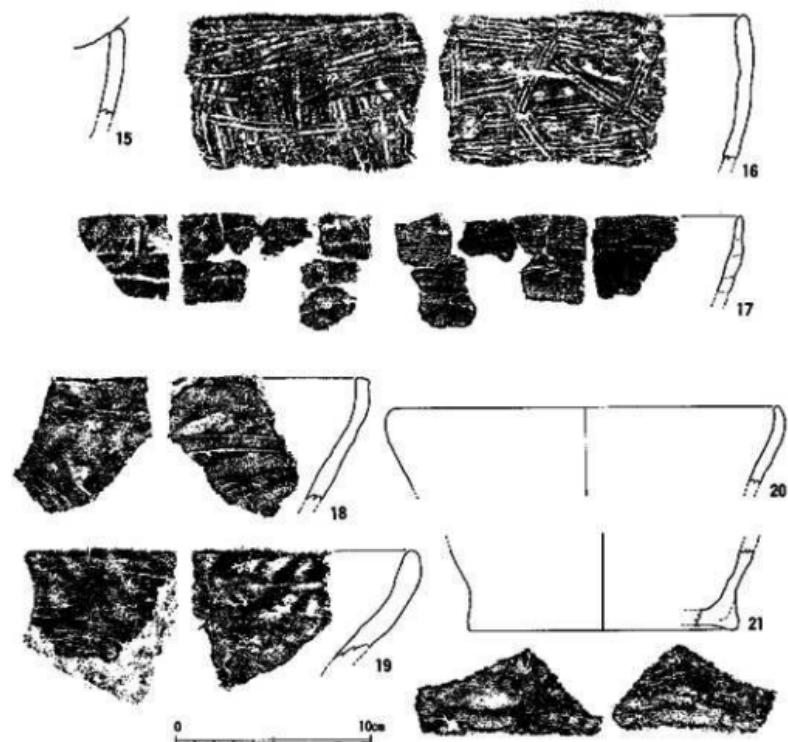


Fig. 20 3号土壤出土土器実測図3 (1/3)

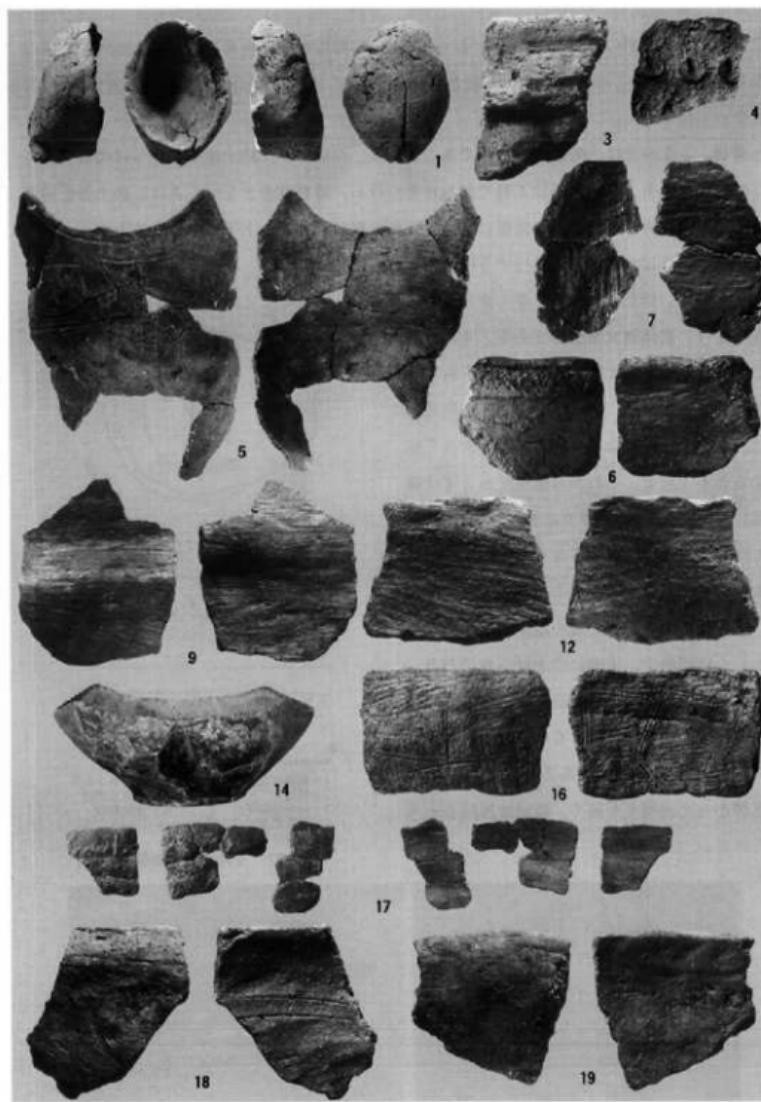


Fig. 21 3号土壤出土遗物 (缩尺不同)

(4) 4号土壤 (Fig. 22-27)

縄文時代後期初頭の貯藏穴である。径140~150cmの略円形の平面を呈し、深さは30~35cmをはかる。第4層より、自然縫とともに磨消縄文系土器片 (Fig. 24-5) と粗製土器片 (同-13) が重なって出土した。

出土遺物 1~3は、阿高式系土器である。1は、口縁部下に粘土縁を貼りつけ突帯をつくる。口唇部と突带上には、棒状工具で刻み目をつける。滑石は含まない。2は、粘土帯を貼り付けて口縁帯を作るもので、口縁帯には棒状工具を横に引いて、上下2本の凹線を引く。滑石は含まない。3は、口縁部に斜行する平行凹線を施すもので、胎土には滑石を多く含む。

4~5は、磨消縄文系土器である。4は、口縁に平行した2本の沈線間にL R縄文を施す。無文部分及び内面は、ナデ調整する。中津式。5は、福田K II式の鉢の側部である。大きく蛇行する3本沈線と、それから派生する2本沈線の間にR L縄文を施す。無文部分及び内面には、横方向の丁寧なハラ磨きを行う。

6~17は、粗製土器である。6~8の外面には、煤が付着する。11~12の器壁は、丁寧なナデもしくは研磨で、平滑に仕上げられており、精製土器もしくは半精製土器とするべきか。13は、ゆるい波状口縁になるものと思われる。

Fig. 25~18は、石鏡である。石材はうすく灰色がかった透明度が鈍く、姫島産黒曜石と考えられる。

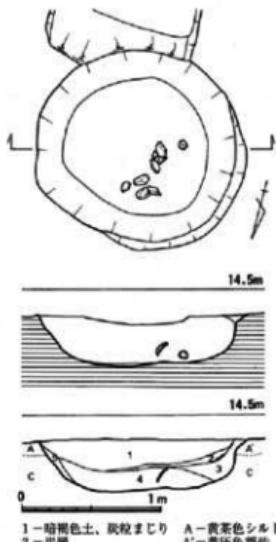


Fig. 22 4号土壤実測図 (1/40)

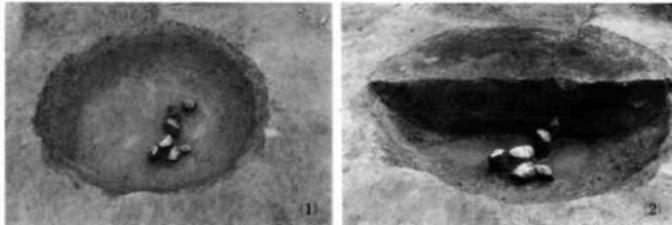


Fig. 23 4号土壤 (1)完掘状況 (2)土層断面 (北より)

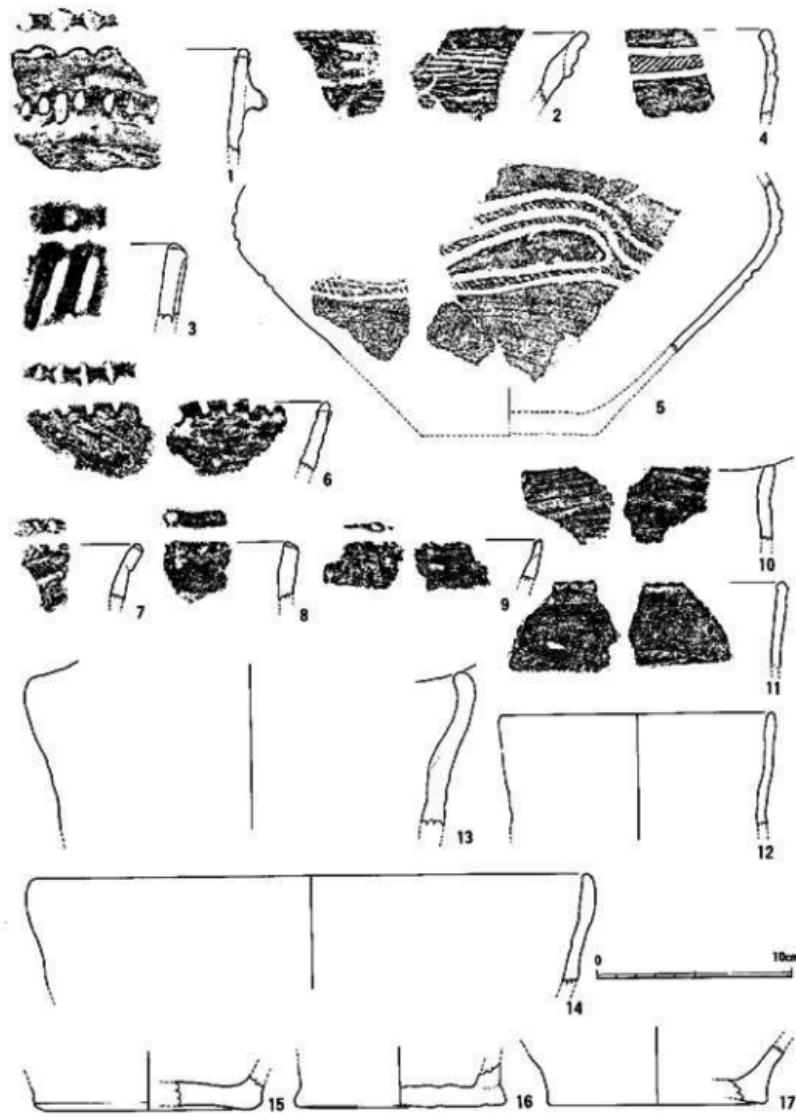


Fig. 24 4号土壤出土遺物実測図1 (1/3)

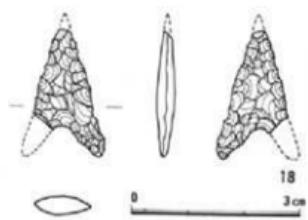


Fig. 25 4号土壤出土遗物实测图 2 (1/1)

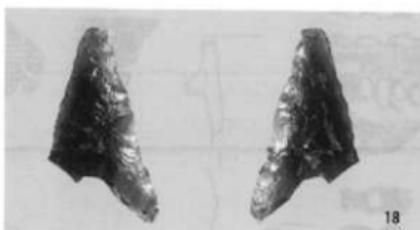


Fig. 26 4号土壤出土遗物 1

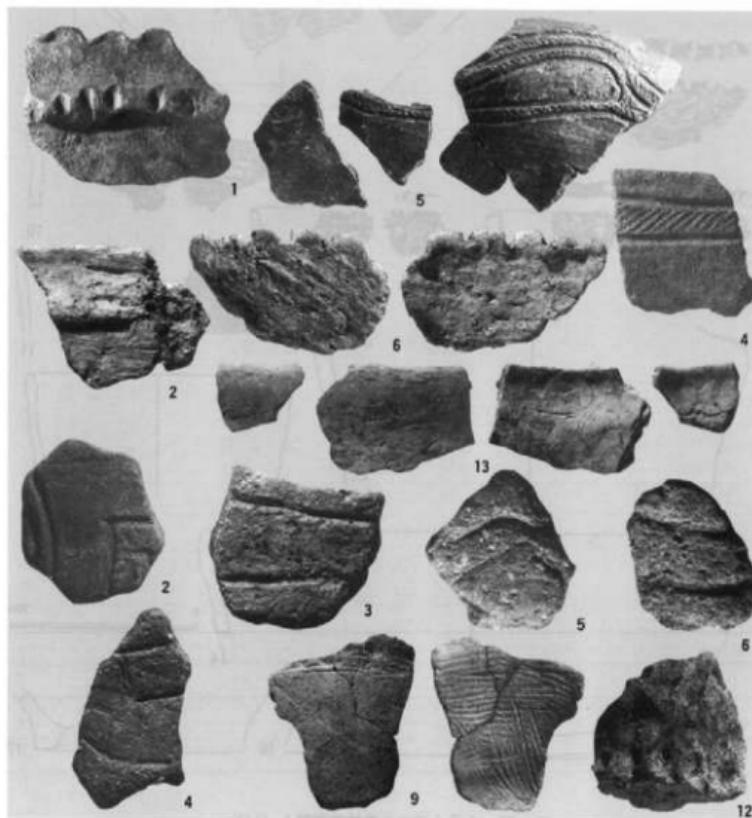


Fig. 27 4号土壤出土遗物 2 · 5号土壤出土遗物 (缩尺不同)

(5) 5号土壙 (Fig. 27~30)

縄文時代後期初頭の貯蔵穴である。径160cm前後の略円形平面を呈し、深さ30~55cmをはかる。断面は巾着形で、側壁はオーバーハング気味、底面は平坦ではなく、丸味を持つ。

出土遺物 1は、阿高式系土器である。口縁の一部に指頭による刻みがつく。胎土には、滑石を多く含む。阿高Ⅰ式である。

2~7は、磨消縄文系土器である。2は、福田KⅡ式の胴部片である。沈線間にLR縄文を施し、赤色顔料を塗る。磨消部と内面は、丁寧にヘラ磨きしている。3~6は沈線文である。内外面ともナデ調整する。胎土・色調から同一個体の可能性がある。中津式の半精製土器である。7の内面には、巻貝条痕が残る。口縁部内面と外面は、丁寧にナデ調整される。

8~9は、粗製土器である。8の口縁部には、指押えで浅い凹み(凹点?)がつけられている。9は、植木鉢形の器形となる。口縁は、一部しか残っていないが、ゆるく波状をなすと思われる。口唇部には、刻みがつく。口縁部下の外面には、二枚貝の肋による横位の平行沈線を引き、沈線上を点々と指頭で押さえて凹ませ、沈線を消している。外面は平滑なナデ調整、内面は上半では横方向、下半では縦方向の二枚貝条痕を施す。復原口径17.9cm、推定復原底径10.5cm、推定器

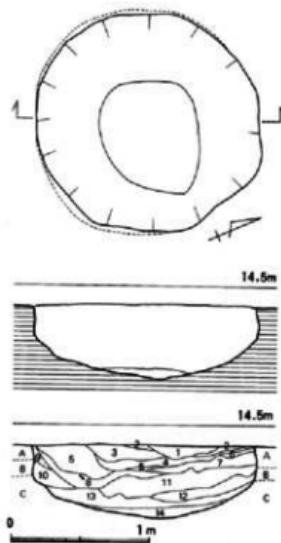


Fig. 28 5号土壙実測図 (1/40)

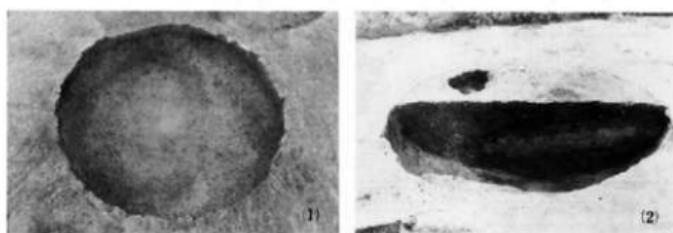


Fig. 29 5号土壙 (1)完掘状況 (2)土層断面 (東より)

高11.6cmをはかる。

10~12は、底部である。いずれも平底となる。11の内底部には、指頭圧痕の凹みが並ぶ。12の体部下位から底部際にかけては、指頭圧痕が文様状に並んでいる。すなわち、底部際に、小さくて深い指頭圧痕が、その上位には広くて深い指頭圧痕が、さらにその上位には広くて浅い圧痕が、互い違いに配される。体部の内・外面は、ナデ調整を施している。

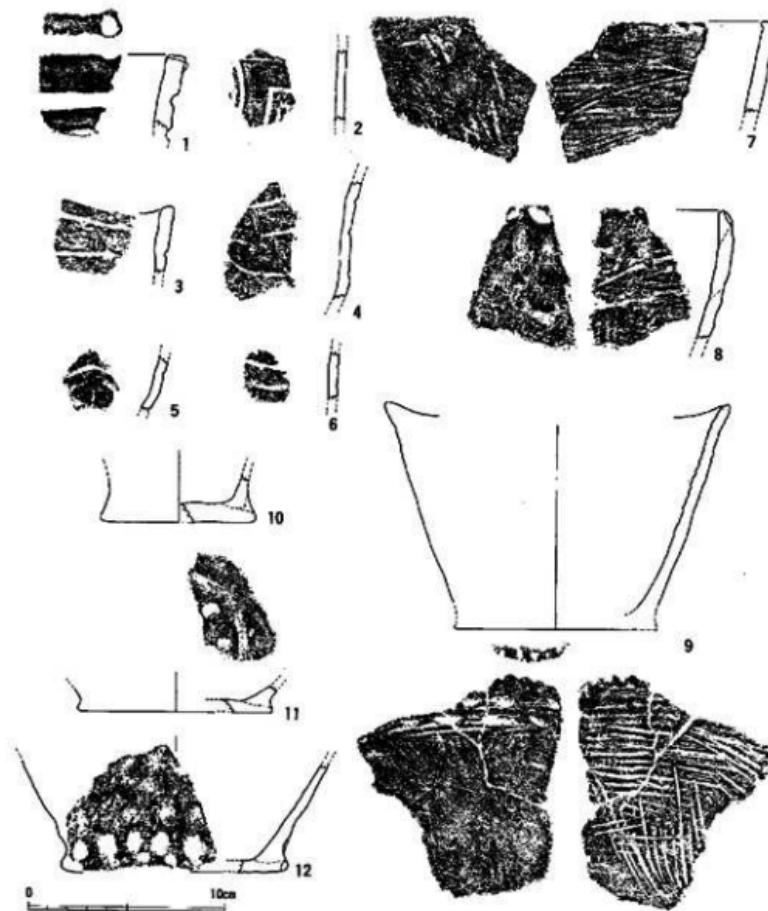


Fig. 30 5号土壙出土土器 (1/3)

(6) 6号土壙 (Fig. 31)

縄文時代後期初頭の貯蔵穴である。径140~150cmの略円形を呈し、深さ50cm弱をはかる。阿高式系土器片・磨消縄文系土器片・粗製土器片が出土したが、図示するにいたらなかった。

(7) 7号土壙 (Fig. 31)

縄文時代後期初頭の貯蔵穴である。長径160cm、短径140cmの楕円形を呈し、深さ40~50cmをはかる。阿高式系土器片・磨消縄文系土器片・粗製土器片が出土したが、6号土壙出土遺物と同様、小片のため図示できなかった。

(8) 8号土壙 (Fig. 5)

古代の土壙である。長径85cm、短径65cmの卵形を呈し、深さ8cmをはかる。埋土は、明灰褐色~灰色で、他の縄文時代の遺構埋土との差は明らかである。須恵器片・土師器片が出土したが、小片のため図示できなかった。須恵器片からみて、8世紀頃の遺構であろう。

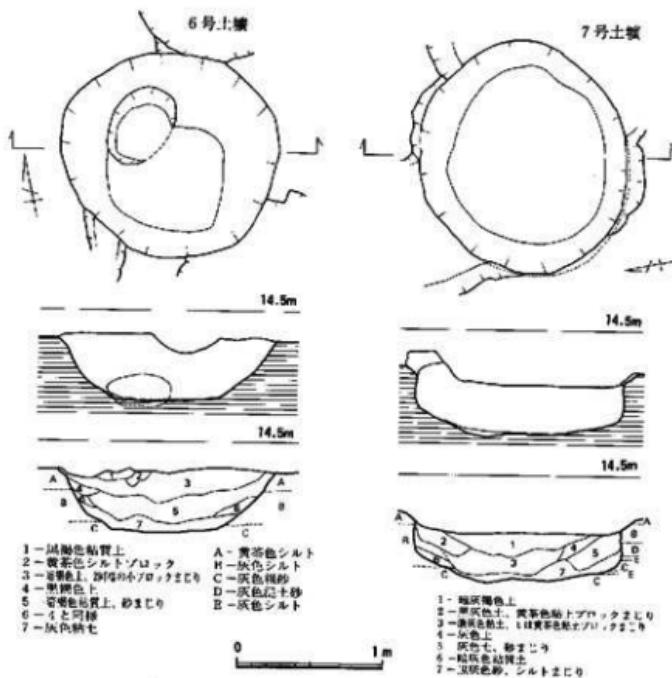


Fig. 31 6号土壙・7号土壙実測図 (1/40)

(9) 1号流路跡 (Fig. 32-48)

調査区南東隅を斜めに切る様に検出された旧河川である。調査区内では対岸を確認できなかった。また、岸は土層図 (Fig. 33) にみる様に急角度をもって落ちこんでおり、蛇行した川の背の部分にあたると思われる。

堆土は、下半は粗砂層が厚く堆積しており、流れが早かったことを示している。その後、一時的に流れは停滞し濃灰色粘土層が全体を覆うが、流れは戻り、2層にわたって粗砂層が形成される。やがて、流路が変わり、黒褐色土層が形成される。この時点では、流路にはすでに流水ではなく、凹みをなしていたにとどまると考えられる。

遺物は、最下層である灰白砂層と、最上層である黒褐色土層中に主として包含されていた。遺物のとりあげに際しては、土層図 (Fig. 33) の1層を上層、3~5層を中層、6層を下層（砂層）とした。また、調査に際して、まずトレンチを設定したが、トレンチ出土の遺物は分層せず、ひとまとめに取りあげている。

これを時期的にみれば、繩文時代中期後半に流路が出来、後期初頭ごろに停滞、そして再び流れたが、まもなく流路が変わり、溝状の凹地と化した、とまとめることができよう。

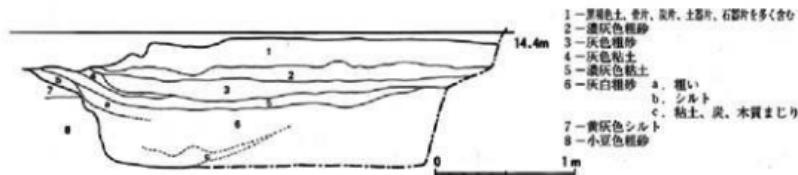


Fig. 32 1号流路跡全景 (北東より)

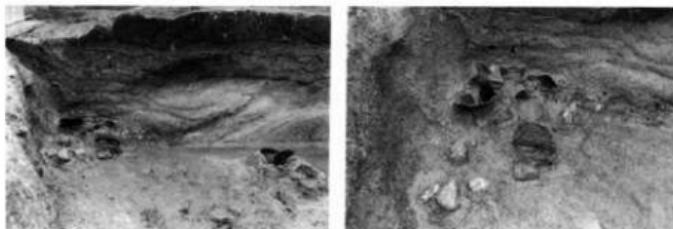


Fig. 34 1号流路跡土層堆積状況・遺物出土状況 (南西より)

下層出土土器 (Fig. 35~40) 1~43は、阿高式土器である。1は、深鉢形土器の口縁である。「の」字形に粘土紐を貼り付け、環状把手をつくる。把手の上面には、棒状工具で刻みを加える。口縁部の凹線文は、この把手の隆起部分に絡む様に施される。色調は、明灰茶色を呈する。2も環状把手の一部である。口縁部上から立ち上げて貼り付けたものである。3・4は、波状口縁をもつ土器で、凹線文は波頂部に集約される。6・8は平縁であるが、刻み口縁の一部に刺突を加え、波頂部に該当するアクセントをつける。特に6では、凹線文は刺突箇所に向かって集約する。8は、口縁部に刺突文様帯を持つ。先の尖った工具で、ややすらして2回刺突して、ひとつの刺突点を作る。7は、無文である。口縁部は抉り状の段差を持った波状口縁となる。口唇には凹線を引くが、波頂部の両端には4本単位の刻みを加える。外面は板目調整、内面は二枚貝条痕調整の後、ともにナデ調整を行う。10~15は、平縁の刻み口縁である。体部文様の上端を横位の凹線が押さえしており、口縁部は無文帯となる。なお、15の凹線は、肩部分に丸味を持ち、引き方にも鋭さを欠く。他の土器の凹線よりも退化した特徴を示し、阿高Ⅱ式に属する。16~26は、口縁を平坦につくる。16~18・20は、6・8の様に口縁部の一部に刻みによるアクセントをつけるが、凹線文はこれと関係なく施される。19・21~24では、凹線文は、平行する横方向の直線を主たるモチーフとする。24~26は、幅広の口縁部文様帯を持つものである。体部文様との境界には、枝状突起を持った凹線が横走する。25は刻み口縁で、口縁部文様の縦の凹線内に穿孔がある。26は平縁だが、口唇部状面に横長椭円形の凹点を並べる。27~38は、脛部破片である。36~38は、体部文様から体部下半の無文部にかけての破片である。36・37は、胎土に滑石を含まない。39~44は底部である。40には、補修孔が穿たれている。なお、5・6・11・12・15・18・22・23・26~28・42の外面、7の内外面には、煤が付着している。

45は、半精製土器である。4本を単位とするゆるい波状口縁を作る。波頂部には、頂点を中心左右に小さな刻みを入れる。外面は横位の研磨、内面は柾目板調整の後、ナデ調整する。2対の補修孔がみられるが、内面まで貫通しているのは、上の1対だけである。胎土には、径1~2mmの砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。滑石粒は、全く含まない。

46~63は、粗製土器である。すべて、滑石を含まない。46~53は、直行する口縁を持つ。46は、波状口縁の一部である。54~56は、口縁部を内彎させる。57は、ゆるくくびれた体部をもつ深鉢形土器である。58~52・57には、煤が付着していた。58~63は、底部である。62の体部内面は、柾目板調整する。48・50・54・62・63には、二枚貝条痕がみとめられる。

なお、阿高式土器の11・15・19、粗製土器の55・60・62、および石器 Fig. 46~147は、数種の自然縛とともに、ひとたまりに出土したものである。(Fig. 35-(2))

中層出土土器 (Fig. 40) 64は、塵消縄文系土器である。研磨した上に、沈線文を施す。中層からは、この他阿高式系土器片、粗製土器片、塵消縄文系粗製土器片などが出土した。

上層出土土器 (Fig. 40~43) 65~76は、阿高式系土器である。65は、ゆるい波状口縁の波頂部に、刻みを加える。67は、粘土円盤を貼り付けた口縁部である。粘土円盤は、つまみ状に口縁部上方にせり出す。68は、ゆるい波状口縁の波頂部である。頂部右側の口唇部には小さな凹点、左側の口唇部外面には棒状工具による刺突を加える。口縁部文様は、指頭による浅い凹点文である。69は、刻みをつけた口縁部である。指頭による刻みは、深く大きい。口縁部内外面には、工具による凹線を施す。滑石は含まない。71は、口縁部に浅くて細い刻みが並ぶ。胎土には、滑石を含まない。74は、ゆるい波状口縁につくる。口唇部には、板状工具の角を用いて刻み目をつけ、口縁部には浅い凹線文を施す。口縁部文様の下は斜めに面取りされており、わずかに肥厚した口縁部文様帯となる。滑石は含まない。75は、74と同一個体の可能性がある。76は口縁部下に貼付突帯を持つ。口唇と口縁部および突帯上面には、棒状工具で凹線を引く。突帯端部には、竹管による刺突を加える。

77~93は、磨消繩文系土器である。77は浅鉢形上器で、R L 繩文の充填繩文を施す。斜めに垂下する繩文帯は、3本沈線で区画される。繩文部には、赤色顔料が残る。器壁は、内外面とも丁寧に研磨されている。中津式の器形に福田K II式の施文を行ったものと言える。78は、口縁にL R 繩文を施す。内外面とも研磨する。小口径に復原でき、大型土器の枝状突起部分とも考えられる。79・80は、福田K II式の口縁部である。口唇上面に沈線を引き、79では口唇上面、80では上面と外側とにR L 繩文を施す。器表は研磨する。81も福田K II式の鉢である。L R 繩文で、無文部は研磨する。破片下端は、丁度沈線部分で割れており、この下部にも磨消繩文が施されていたことがわかる。82はR L の充填繩文で、赤色顔料が残る。丁寧に研磨される。83~85は、磨消繩文の胴部片である。83はL R 繩文、84は不明、85は擬似繩文で、84には赤色顔料が残る。86・87は、沈線文である。88~90は半精製土器である。88には、擬似繩文が認められる。89は波状口縁で、頭部に巻貝基部の刺突文が並ぶ。福田K II式。90には、R L 繩文がみられる。中津式。91~93は、粗製土器である。91の口縁部端部には貝殻の刺突による刻み目、口唇には巻貝による押し引き文が施されている。福田K II式である。

94は、無文の精製土器である。口縁部は波状口縁で、受け口状に肥厚する。波頂部に装飾が貼り付けられていた様だが、剥離している。内外面とも丁寧にナデ調整される。

95~116は、粗製土器である。95~99は、口縁部を内厚させるもの、100~108は、口縁部が直行するもの、109~111・113は外反させるものである。105は、内外面とも二枚貝条痕調整する。内面は、指ナデ調整で条痕をナデ消す。口唇には、指頭による刻みを加える。胴部中位の破片を欠く。106は、磨滅のため調整がはっきりとはわからないが、内外面とも二枚貝条痕が認められる様である。底部は指押え、内底部から体部に移る屈曲部は指ナデする。111は、棒状工具を斜めにあてた刻みを持つ。110と111は、内外面二枚貝条痕調整し、口縁部内外面はナ

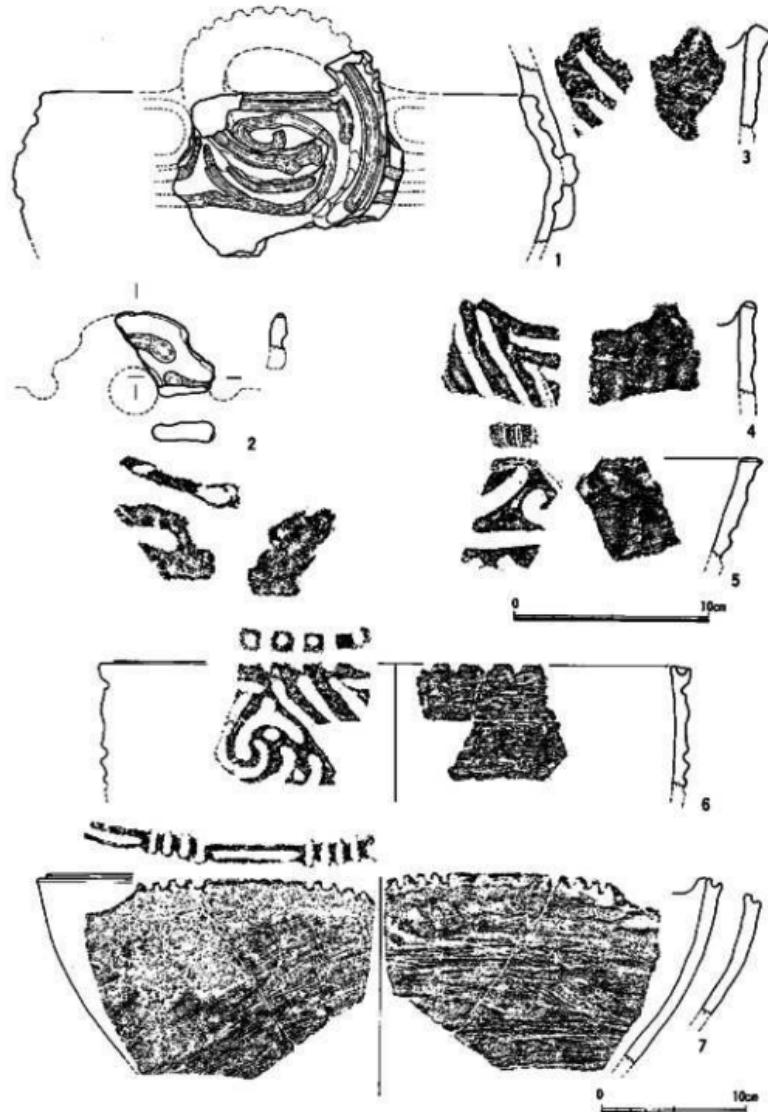


Fig. 35 1号流路脉出土遗物实测图 1 (1/3 + 1/4)

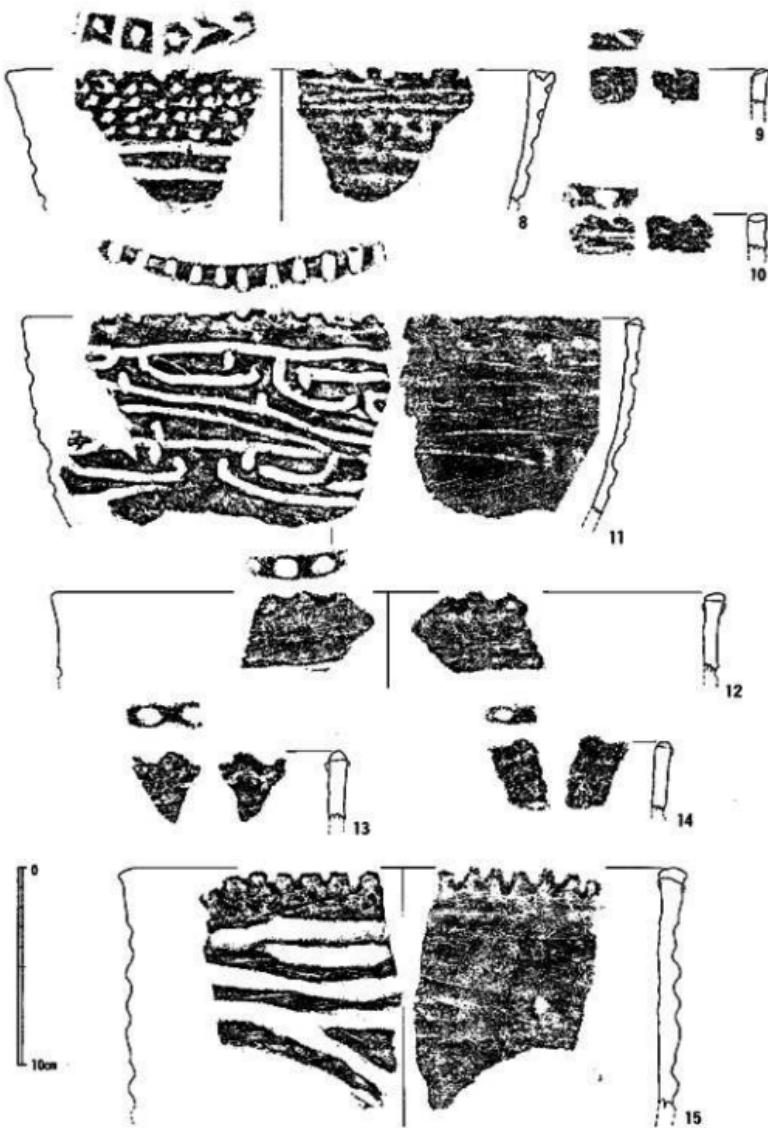


Fig. 36 1号道路出土遗物实测图 2 (1/3)

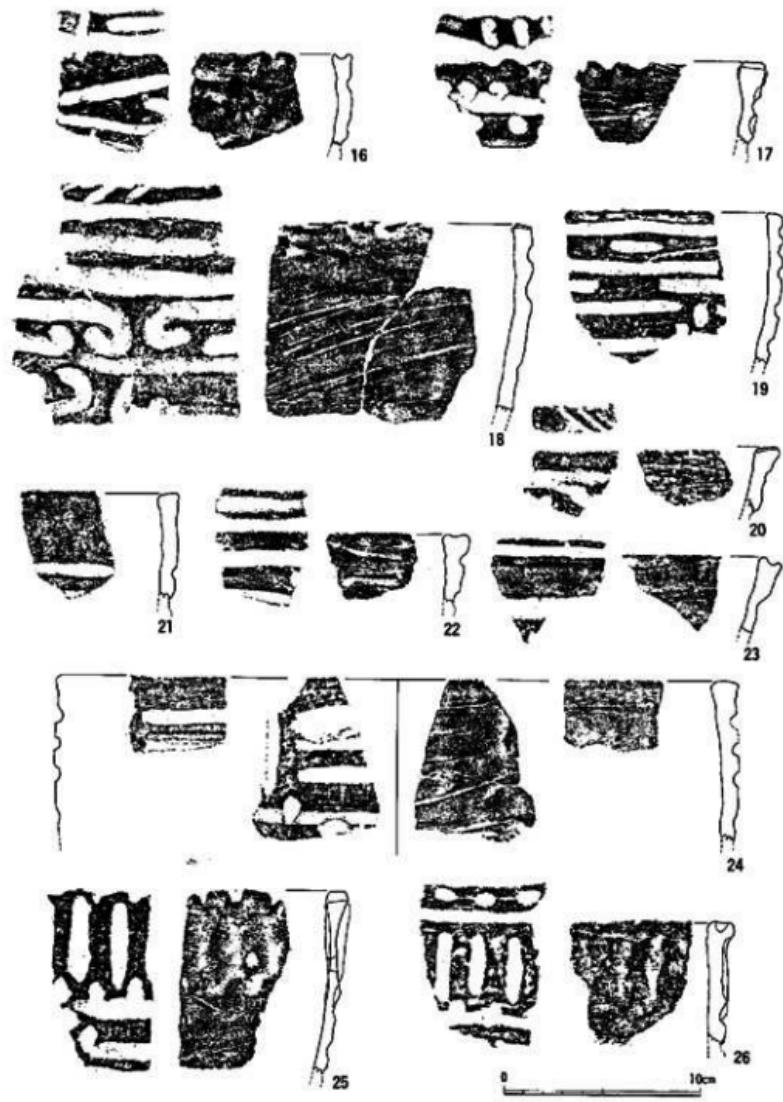


Fig. 37 1号道路跡出土遺物実測図 3 (1/3)

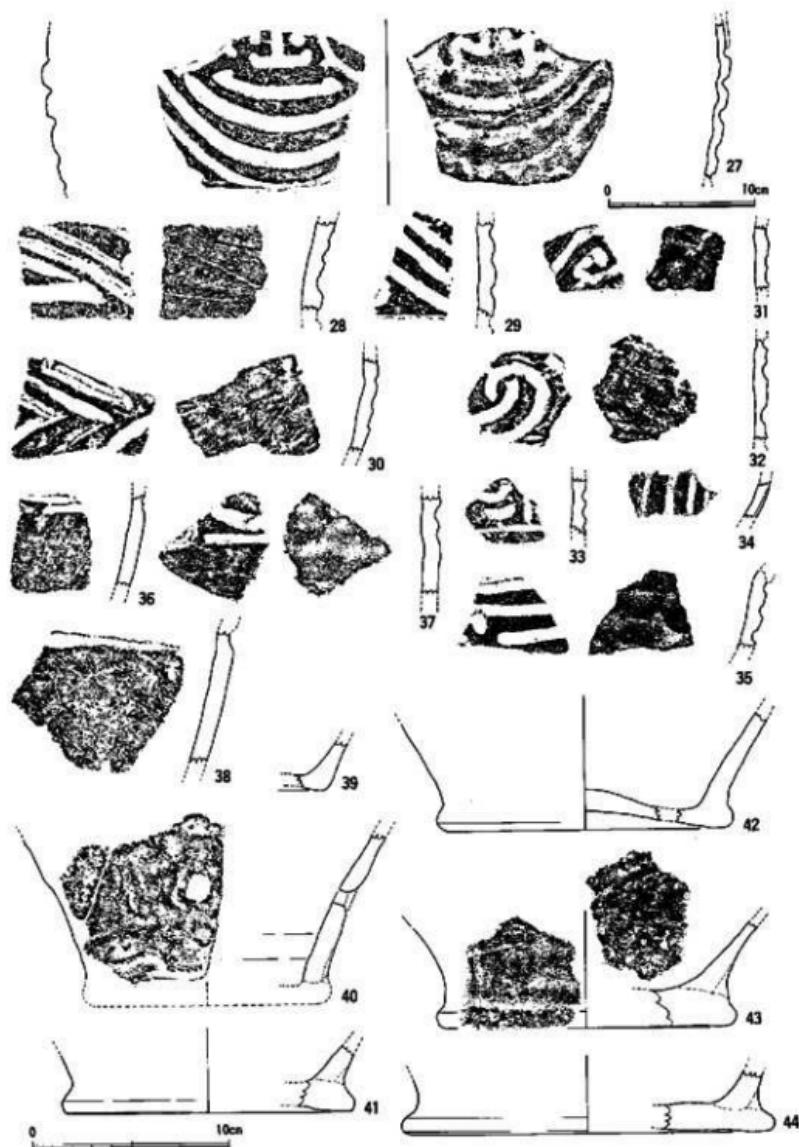


Fig. 38 1号道路出土遺物実測図4 (1/3・1/4)

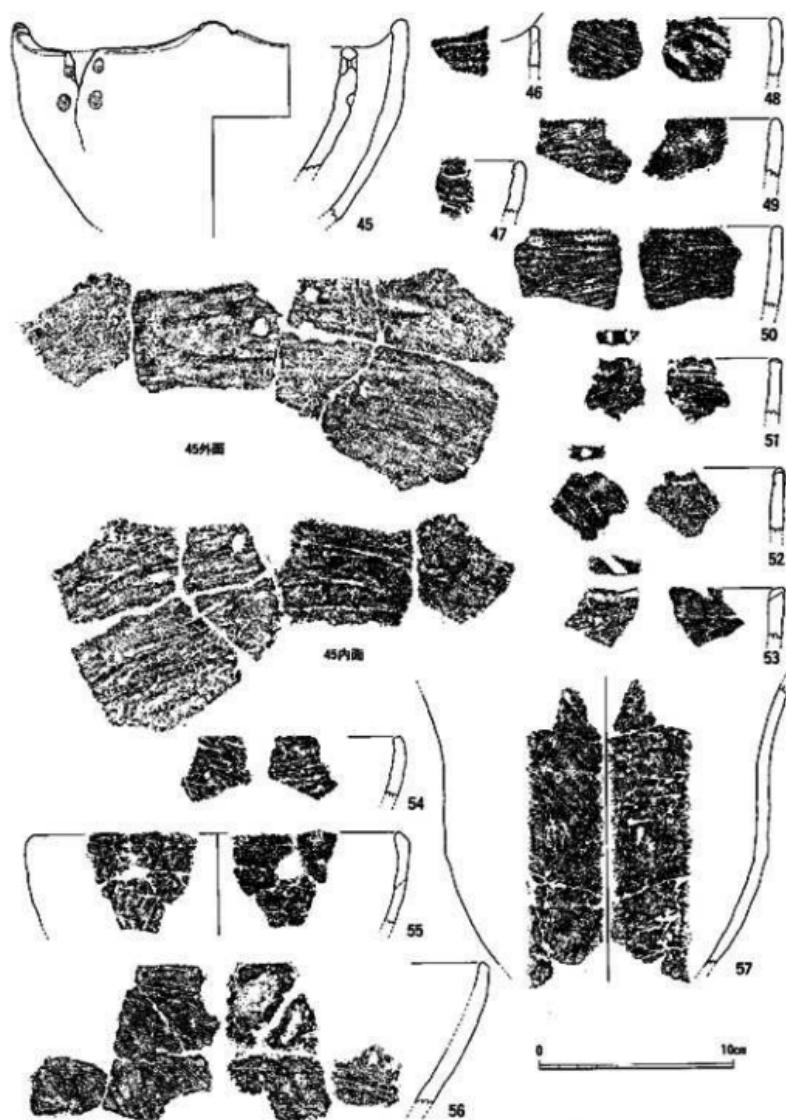


Fig. 39 1号道路跡出土遺物実測図 5 (1/3)

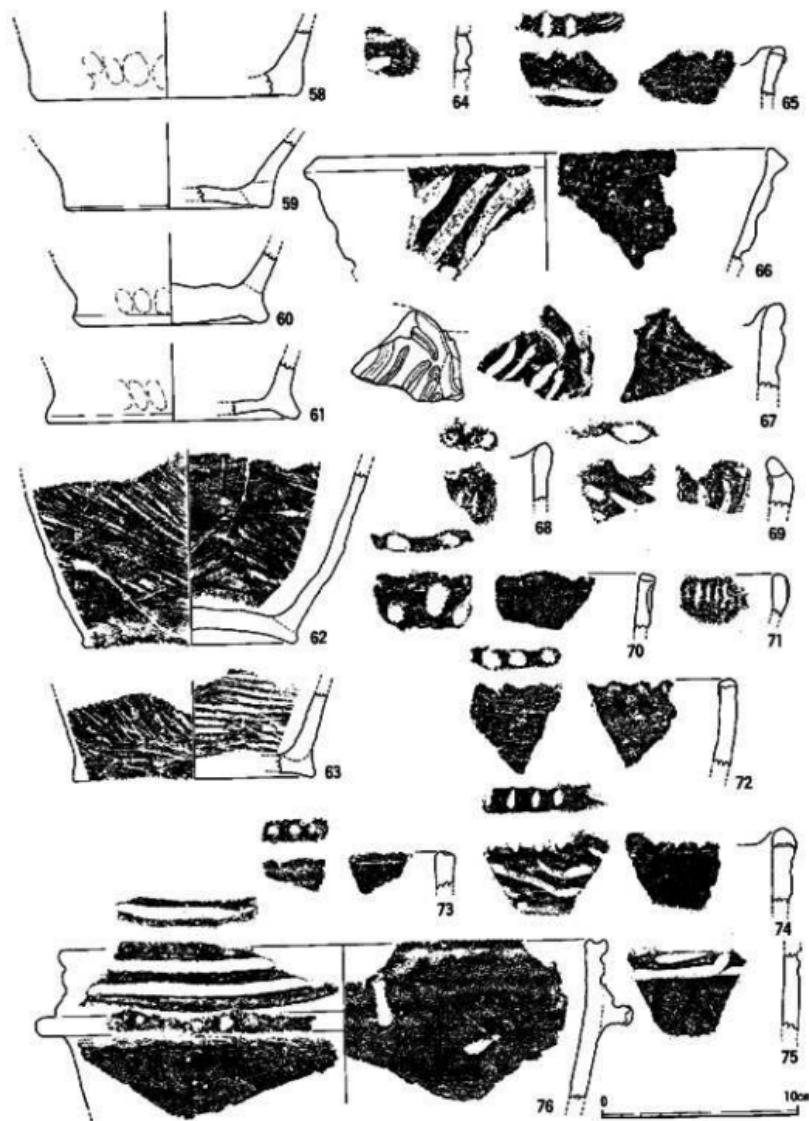


Fig. 40 1号道路出土遺物実測図 6 (1/3)

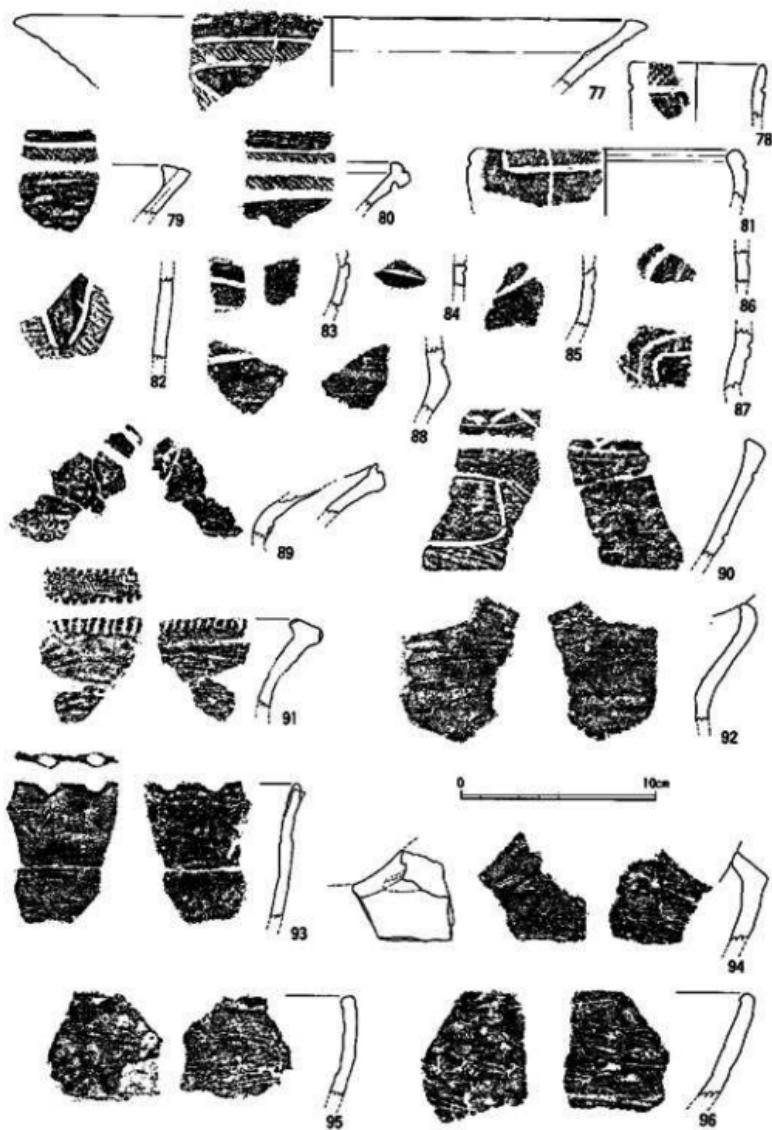


Fig. 41 1号道路跡出土遺物実測図 7 (1/3)

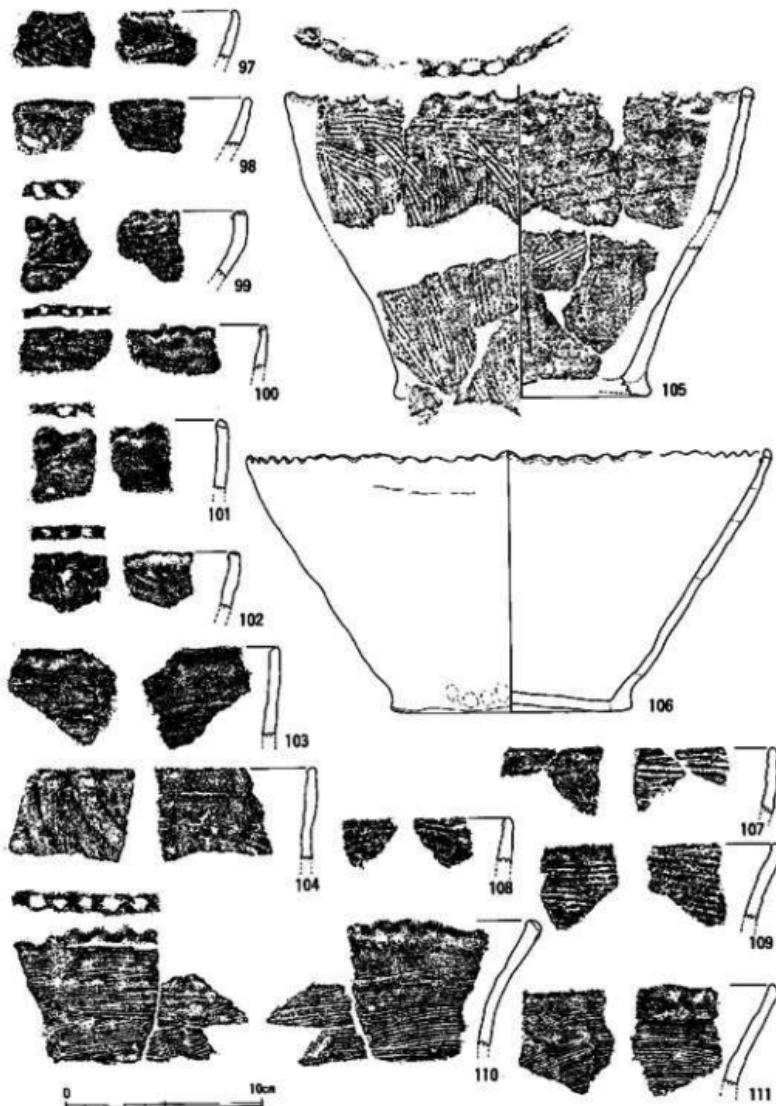


Fig. 42 1号路路基出土遗物实测图 8 (1/3)

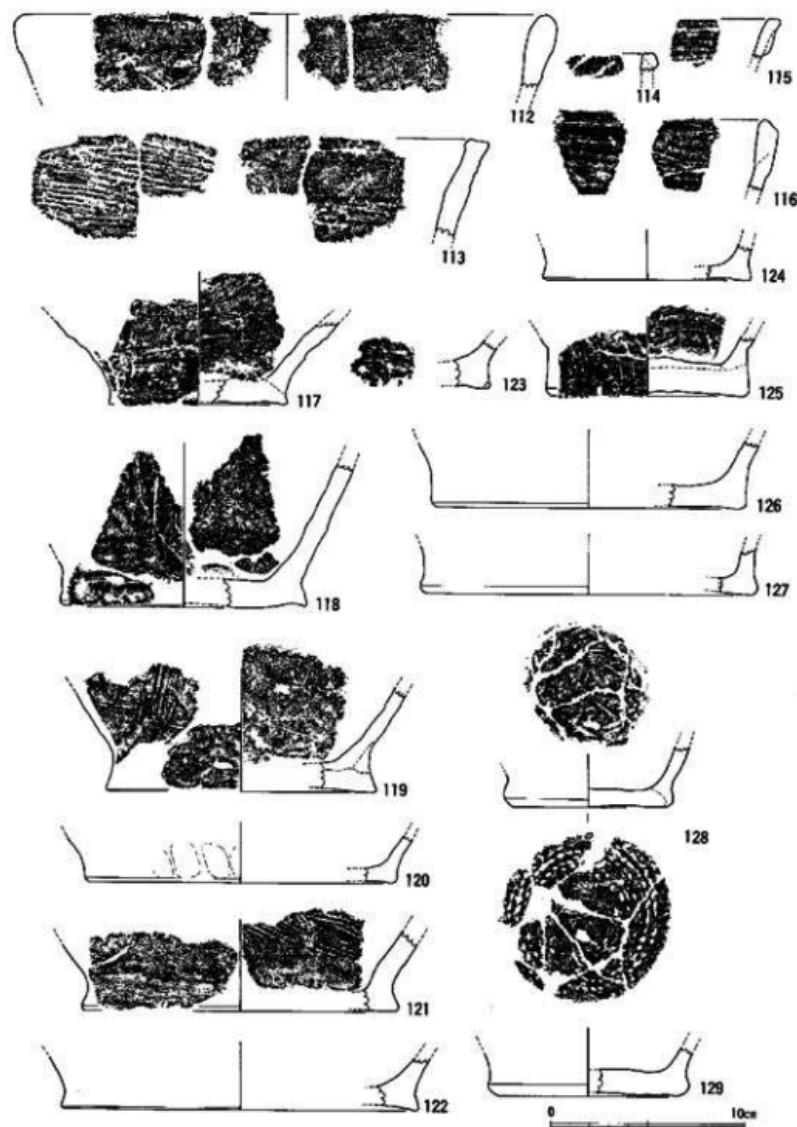


Fig. 43 1号道路跡出土遺物実測図 9 (1/3)

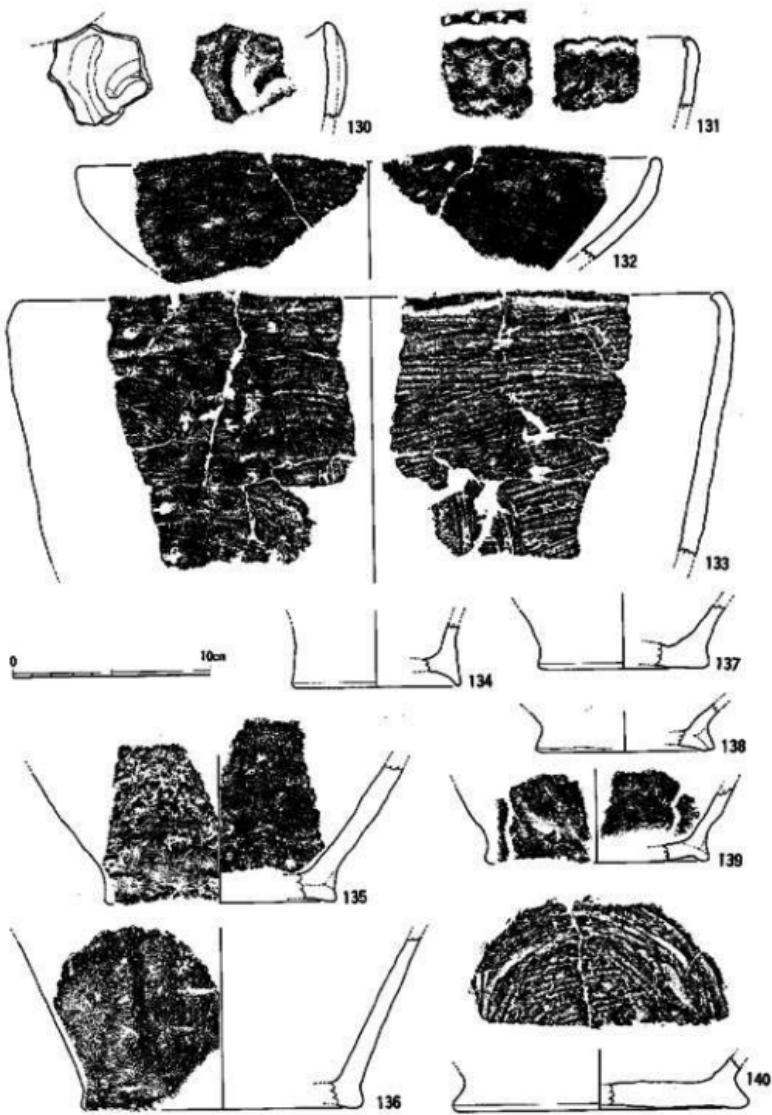


Fig. 44 1号路跡出土遺物実測図10 (1/3)

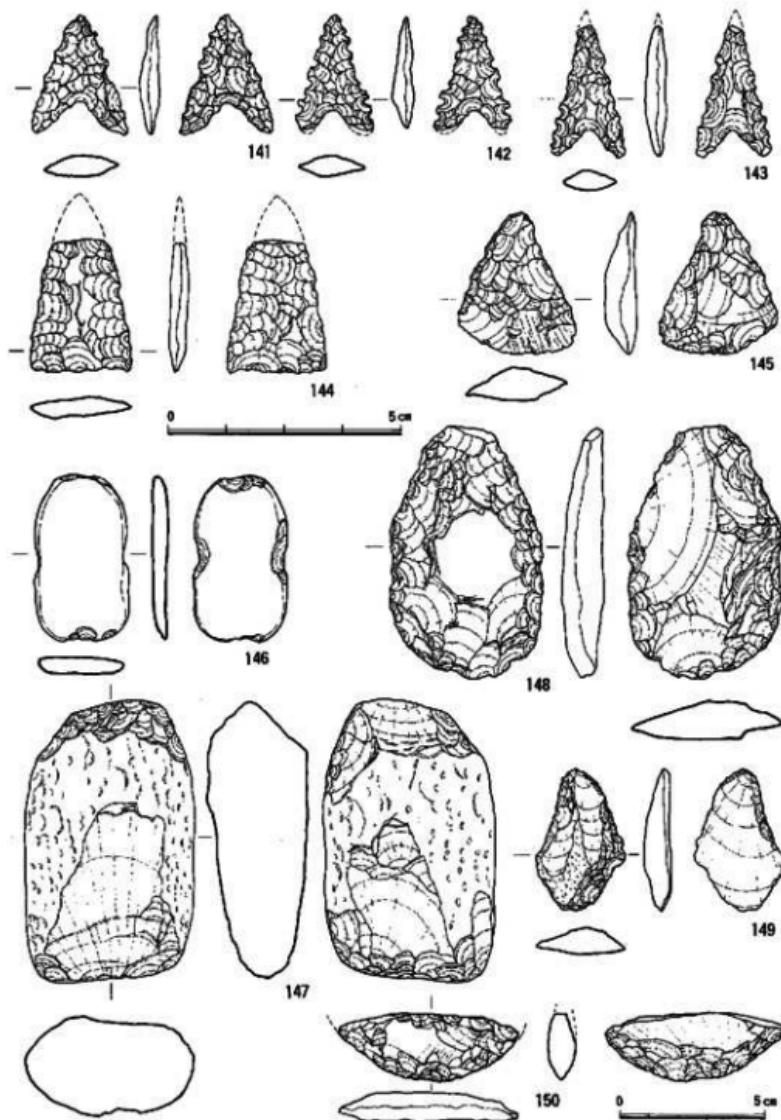


Fig. 45 1号道路出土遺物実測図11 (1/1・1/2)

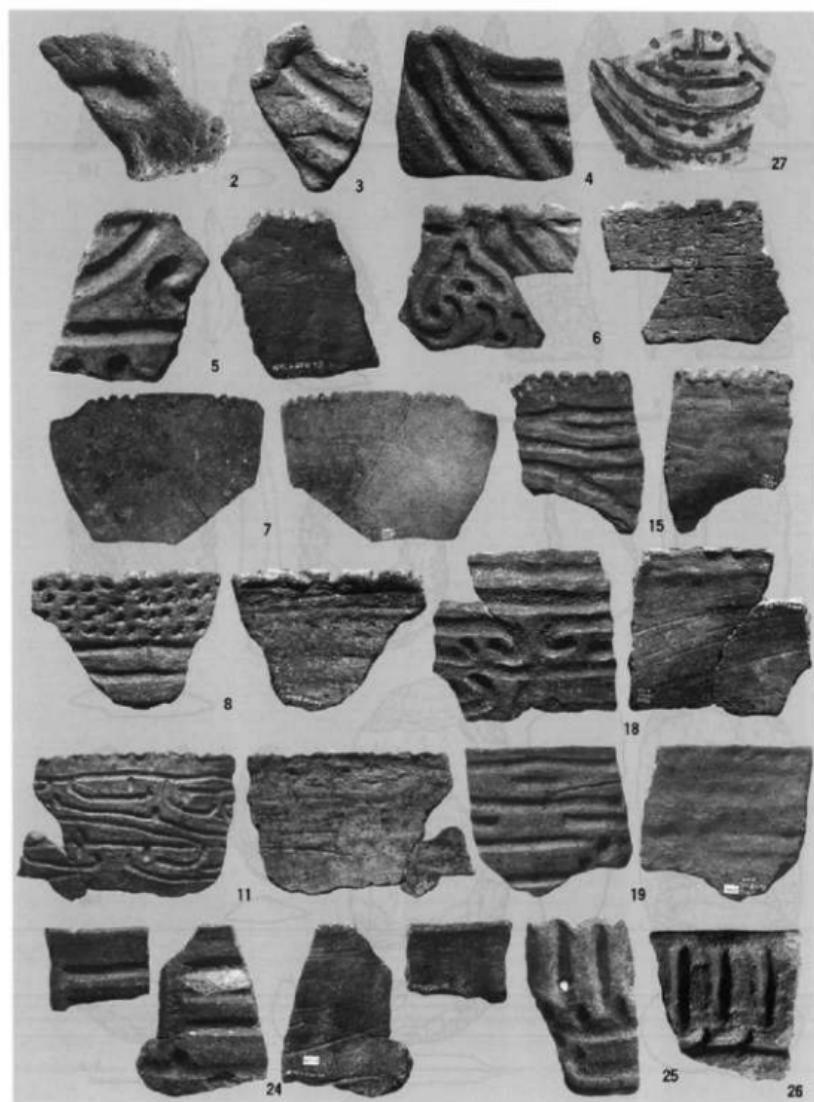


Fig. 46 1号流路跡出土遺物 1 (縮尺不同)

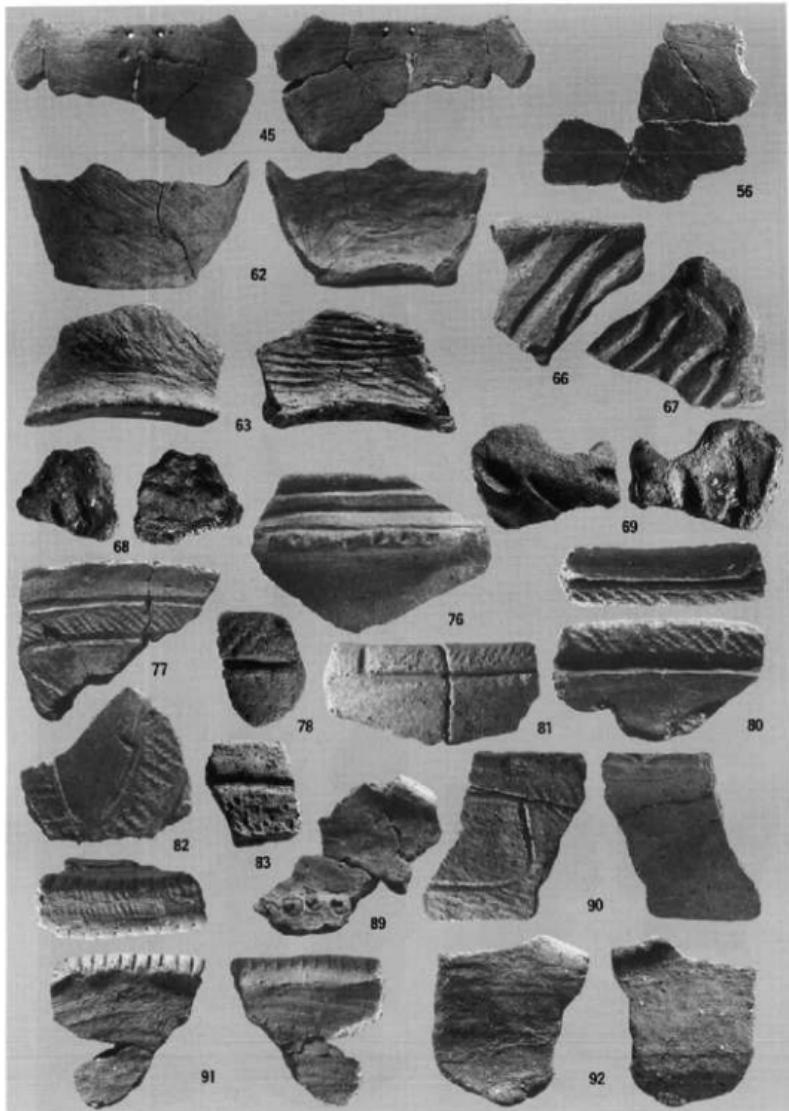


Fig. 47 1号流路跡出土遺物 2 (縮尺不同)

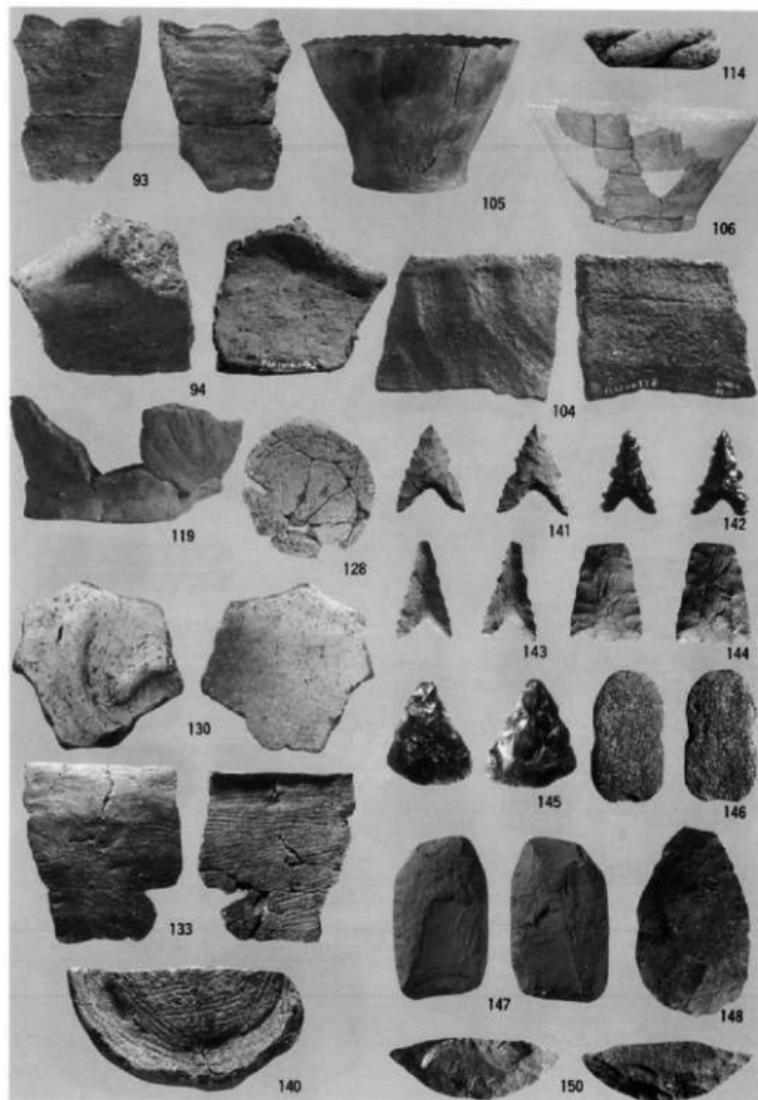


Fig. 48 1号流路跡出土遺物3 (縮尺不同)

テ調整する。色調は茶色である。110では、口唇に指頭による刻みを加えるが、胎土・色調・器形など極めて類似し、同一個体の可能性がある。114は、ねじった粘土紐を口唇部に貼り付ける。115は、口縁部に粘土を貼り付け、段差をつけて肥厚させる。

117～129は、底部である。117～122では、底部端部は細く尖り、外方へ張り出す。123の外底端部には、刻み目がつく。125～127は、直立気味に立ち上がる。128・129は、丸味を持って外方へ張るもので、128の外底部には、縦目压痕がつく。

トレンチ出土土器 (Fig. 44) 図示したのは、すべて滑石粒を含まない土器である。130は波状口縁を呈し、波頂部下に貼付溝文を持つ。132は精製浅鉢で、内外面とも研磨される。140の内底部には、二枚貝条痕調整が施される。

石器 (Fig. 45) 141～145は石鎚である。141・143・144は安山岩、142・145は黒曜石製である。145は未製品で、一部に原石の風化面を残す。146は石錘である。四辺には、小さなノッチがつく。扁麻岩製である。147は、叩き石である。石斧の転用品で、剥離のない部分には撃打が加えられている。安山岩製。148・149は搔器である。149は一部に石肌を残す。安山岩製。150は横型石匙の刃部であろうか。実測団上方の面は、破面である。安山岩製。147は下層出土。141は中層出土。142はトレンチ出土で、他は上層から出土した。

00 包含層出土遺物

遺構検出面を覆う灰色土層からの出土遺物の内、縄文時代のもの一部を図示する。1は円形把手である。二枚貝を模したもので、外面には二枚貝の肋を押付け、内面の隆起部にはヘラで刻み目をつける。中津式。2～4は、滑石を混入した阿高式系土器である。5・6は粗製土器である。6はゆるい波状口縁を呈し、口唇部には爪による刺突がならぶ。

7～13は石器である。7は搔器であろうか。安山岩製。8～13は、石鎚である。10は未製品で、原石面を残す。8・9は安山岩、10～13は黒曜石製である。



Fig. 49 包含層出土遺物 (縮尺不同)

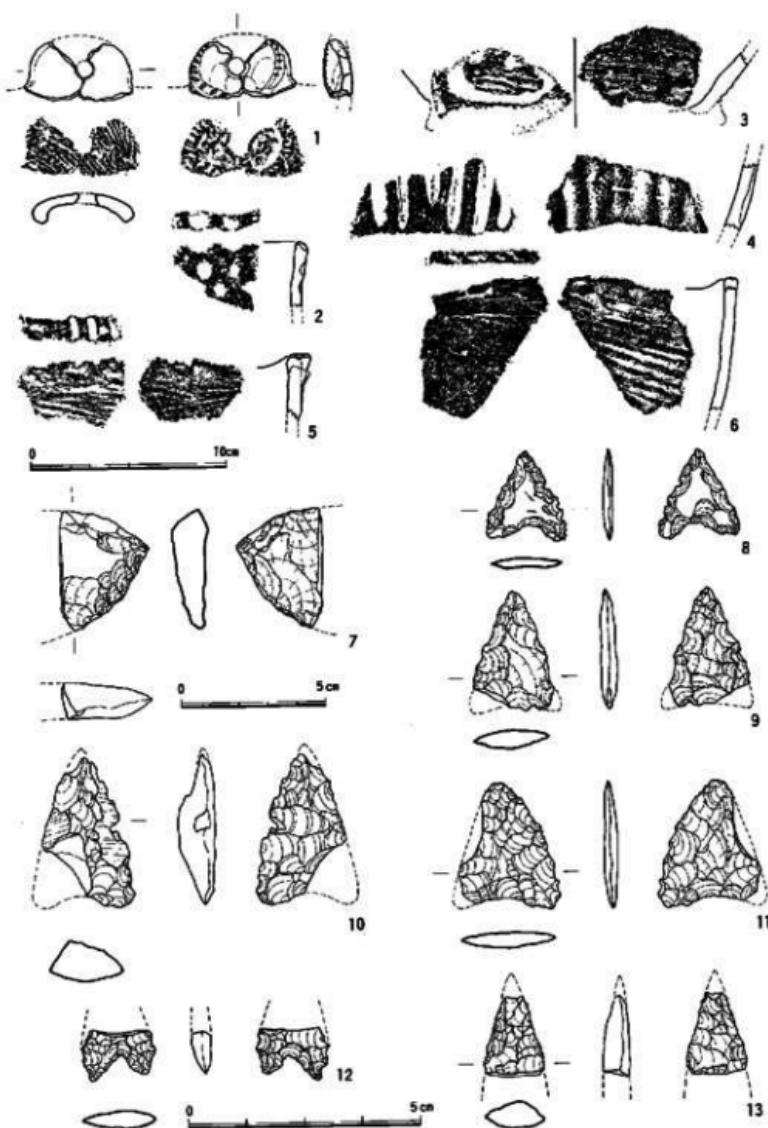


Fig. 50 包含層出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)

第三章 まとめ

今回の調査では、縄文時代中期後半～後期初頭の河川1条、後期初頭の貯蔵穴・土壙7基、古代の土壙1基を検出した。報告書の末尾にあたり、若干の考察を加えてまとめとしたい。

1. 縄文時代の遺構分布について 野多目括渡遺跡では、これまでに第1次調査で、後期初頭の貯蔵穴50基前後、溝状遺構1条、河川1条を、第2次調査では後期初頭の貯蔵穴3基、河川1条を、第3次調査では晩期前半の貯蔵穴4基、溝状遺構3条を検出した。これらの遺構の分布状況をみると、貯蔵穴は大きく東に向かって弧を描き、第1次調査地点では河川の東岸に、第2次・第4次調査地点では西岸に分布している(Fig. 2)。河川は、大きく蛇行して各調査地点をつなぐが、本調査により、後期初頭の早い段階で流れが変わり凹地化していたことが知られた。よって、貯蔵穴が営まれた時点では流水ではなく、その設営を妨げるものではなかったのである。ところで、貯蔵穴群の東に接する中位段丘上を調査した第1次調査では、縄文時代の住居遺構は検出できなかった。この結果と、貯蔵穴の分布が描く弧の中心が西側にあることを考えると、調査地点の西方に舌状にのびるもうひとつの中位段丘が注目される。この段丘は、野多目日遺跡とされているが(Fig. 1)、現在は野多目小字東の集落で、調査例はない。現時点では憶測の域を出ないが、縄文時代の集落の中心は、調査区西側の中位段丘上にあり、集落の東に接し湧水の得やすい旧河道付近に貯蔵穴を営んだものと考えたい。

2. 貯蔵穴について 本調査検出の貯蔵穴は、第1次調査検出のそれと比べて、概して浅い。しかし、第1次調査地点の西辺から本調査地点にかかる低地は、那珂川中流域にみられる谷底平野の一部であること、本調査の遺構検出面上には古墳時代～古代の包含層が堆積している点からみると、開田等による大きな地形変更を想定する必要はなかろう。したがって、本調査検出の貯蔵穴は、おおむねその本来の形状をとどめていると考える。一方、貯蔵穴床面の標高をみると、第1次～第4次調査を通じて13.5～14.0mと、ほぼ一致している。

これは、おそらく湧水を考慮した結果であり、本調査地点では、アクリ抜きに十分な湛水を得るのに、深く掘り下げる必要がなかったことを示すのであろう。

貯蔵穴の時期については、阿高式系上器では坂の下II式の末期から直後、磨消縄文系土器では中津式・福田K II式土器が出土しており、後期初頭に位置付けられる。ところで、第1次調査の貯蔵穴からは中津式土器は出土したが、福田K II式土器は出土していない。本調査では、1号土壙は中津式だが、3～5号土壙では福田K II式土器が出土した。よって、貯蔵穴群は、第1次調査地点から本調査地点へと、その分布の中心が移ったものと考えられる。

3. 縄文土器について 本調査においては、1号流路跡下層から縄文時代中期後半の土器、同中層、上層および貯蔵穴群から後期初頭の土器が出土した。

1号流路跡下層出土土器は、胎土に滑石を混入し、大型凹線で器面を飾った阿高式土器114片と、滑石を全く含まない無文土器199片よりなる。阿高式土器のほとんどは阿高Ⅰ式土器で、若干の阿高Ⅱ式土器(Fig. 37-15)が混じっていた。⁽¹⁾ここで注目したいのは、滑石を含まない無文土器の存在である。滑石を含むか否かは、必ずしも阿高式土器認定の根拠とはなりえない。⁽²⁾しかし、有文土器のほとんどすべてが滑石を含むことから、無文土器が滑石混入の有文土器に対置された存在であることが考えられ、いわゆる粗製土器として位置付けることができよう。従来、阿高式土器における粗製土器の出現は、後期初めにおかれてきた。1号流路跡下層土器における無文土器の存在は、これを中期後半に遡らせるものと言える。

後期初頭の土器については、阿高式系土器、磨消繩文系土器とともに、精製・半精製・粗製土器がそろっている点が注目される。両者の破片数をみると、1号流路跡上層では阿高式系⁽³⁾1184片、磨消繩文系58片、1号土壙ではそれぞれ488片、70片、3号土壙では174片、22片、4号土壙では175片、21片、5号土壙では115片、7片と、阿高式系土器の比率が高い。これらの点は、第1次調査の報告の中で、中津式期の状況として指摘された傾向と一致するものである。本調査出土上層では、主体は福田KⅡ式期にあるから、この状況が中津式期から福田KⅡ式期まで継続したことが言える。なお、阿高式系土器と磨消繩文系土器の併行関係についてみると、1号土壙では坂の下式の凹点文の退化した土器(Fig. 8-5・6)に中津式が伴っている。3-5号土壙では、口縁部文様帯に幅の狭い凹線が施された土器(Fig. 18-3、Fig. 24-2)や、凹点文が突帯上の刻みと化した土器(Fig. 24-1)に福田KⅡ式が併出した。中津式については、第1次調査の報告の中で、坂の下I式後半からII式に併行することが指摘されており、本調査出土例から、これが坂の下II式末期までのび、坂の下II式末期から直後に福田KⅡ式が併行するものと言えよう。

- (1) 地形環境については、「福岡市土地分類細部調査報告書」福岡市 1989年、および下山正一「福岡平野における繩文海進の規模と第四紀層」九州大学理学部研究報告 地質学 第16巻第1号 1989年による。
- (2) 第2次調査は、下水道敷設に伴う発掘調査で、調査・報告にあたっては、下水道局が設定している水準高を用いている。これは、国土地理院による標高に対して、1.773m高い数値をとっている。そのため、他の調査地点との比較に際しては、報告された箇面から、1.773mを減じ、標高値に換算した。
- (3)-(4) 土器型式の認定にあたっては、田中良之氏に御教示をいただいた。
- (5) 例えば、並木式・阿高式の著名な遺跡である熊本県沖の原貝塚出土土器や前期から後期にいたる上器が層序をなして出土した熊本県大矢遺跡の阿高式系土器は、滑石を全く含んでいない。なお、大矢遺跡の資料は、そのほとんどが整理中で未発表であるにもかかわらず、調査を担当した山崎純男氏の御厚意で実見させていただいた。
- (6) ここでは、磨消繩文系に属さない土器は在地系とみなすという観点から、阿高式系土器として数えた。同一個体以外の全ての破片を数えたが、重複をさけるため、底部の点数は加算していない。
- (7) 田中良之「各堅穴出土の繩文土器について」『野多目古渡遺跡』市報第93集 福岡市教育委員会 1983年

野多目古渡遺跡 4

福岡市埋蔵文化財調査報告書第333集

1993年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 秀巧社印刷株式会社

福岡市南区向野2丁目13-29

